會報

1962年6月　221　日本山岳会

山と私

中河与一

山に興味を覚えだしたのは近年のことである。殆ど何も知らない。それだけに山にゆくと出来るだけ多くのことを知りたいと思ひ、触れ得ることは何でも経験し、学び得ることは何でも身につけたいと思ってゐる。

幼児の如く総てが鮮烈に見え、総てがつきない興味をそそる。誘はれると身のほどを忘れて何処へでも行きたくなってしまふ。歳がひもなく病気にかかってゐるのではないかと思ふことさへある。

私がやや高い山に登りだしたのは白馬に登って以来のことである。その日は白馬も荒れ気味であったが、丁度九州に十二号台風が上陸して、椎葉ダムの現場の小屋が強風に吹かれて、五六軒山腹から吹き落されて沢山の死傷を出した時であった。

その新聞記事を山からおりて来た翌日の朝、浅間温泉でよんで、そこの工事に従事してゐた子供達の安否を真剣に気づかったのを覚えてゐる。

何も知らなかったのに、その夜の夢に不思議に子供達が出て来たのであるから、これは正夢かもしれないと随分心配したが、無事であることが数日後にわかった。

強ひて解釈しようとすれば、どんな風にでも解釈出来るが、私はただ偶然のことと思って格別夢解きはしなかった。

少年の頃は山中の巨岩の上を柴を腰に敷いて辷ったり、茸をとりに行ったり、長じてからは讃岐富士などによく登ったが、登山といふやうなことは何も知らずに成長した。

石槌山とか剣山といふやうな高山が（郷里の）四国の中心に聳えてゐることは知ってゐたが、修験者が登る話をきくだけで、そんなところへ登ってみようなどとは夢にも考へたことがなかった。

東京へ出てからはただ身辺の仕事に追はれて、時たまスキイに出かける程度で、それも殆ど上達しなかった。バスが不通になって竜頭からスキイをかついで戦場ケ原を横ぎり奥日光へ行ったことや、万座の急傾斜で人の倒れてゐるところへ自分のスキイを突っかけてひどく腰をうったことなど思ひだすが、さして山に親しむといふほどのことはなかった。

一度サイパン島のタッポーチョに登ったことがあったが、ジャングルの中で幾度か、はげしいスコールにおそはれたのをおぼえてゐる。

それが昭和十一年「天の夕顔」の中でアルプス山中のことを書き、山について多少とも経験があるやうに誤解せられて以来、ラジオなどでよく山のことを尋ねられることがあった。それでも山に行かず、勿論何も知らぬのであるから、知らぬ弁をのべるのがせいぜいであった。

それが近年になって、やっと十年位前から少しづつ山に行きだした。すると何とも言えぬ山の魅力に憑かれてしまって、今の私は相当つよい山の病気にかかっているやうな有様である。

私の場合は書くことの方がさきで、実行が大体廿五年おくれた。「生活は芸術を模倣する」といふが、私は私の書いて来たことを、これからボツボツ生活してゆくつもりかもしれない。

日暮れて山遠しといふところである。それにしても先輩達の文章など読むたびに、これらの人々の先見や、自覚、その山に対する新鮮な感覚には息がつまるほど驚嘆することが多い。

（三七、五、二一）

ヒマラヤン・ニュース

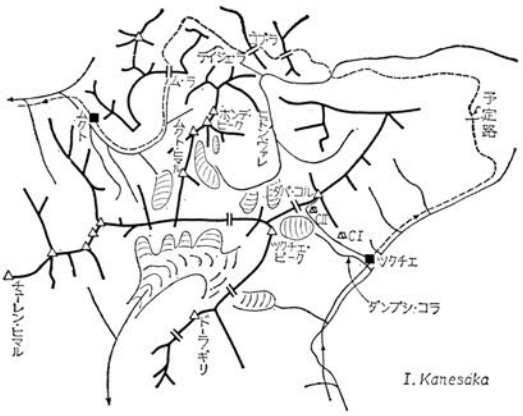
◇ビッグ・ホワイト・ピーク登頂◇

全日本山岳連盟一九六二年（第三次・読売新聞社後援）ヒマラヤ登山隊（高橋照隊長ら八名）は、五月三日、五日の両日、三隊にわたりビッグ・ホワイト・ピーク（七、〇八三メートル）の初登頂に成功した。まず三日午前六時、第一次隊の森田格、安久一成両隊員が第7Cを出発、午後二時三分初登頂をなしとげた。

雪はあったが晴天だった。頂上は幅三メートル、長さ八メートル、南北に長く東西に傾いた堅く雪の凍りついた平たん地であった。つづいて五日、第二次加藤幸彦、高島誠隊員が午前九時半、第三次中野副隊長、石田嘉一、秋山正人三隊員が午前十一時半それぞれ登頂した。

◇ヌプチュ登頂

東部ネパール・ヒマラヤのヌプチュ（七、〇二八メートル）を目ざしていた大阪府立大学の東北ネパール学術調査隊（中尾佐助隊長ら八名）は五月二十日、二十一日の両日同峰の初登頂に成功した。ネパール外務省に入った報告によると頂上には六名の隊員と三名のシェルパが立った。



——ムクト・ヒマール付近概念図——

◇ホンデ・ピーク登頂

西ネパール、ムクト・ヒマールの学術調査と未踏主峯の登頂をめざしていた日本大学ヒマラヤ遠征隊（石坂昭二郎隊長ら四名・読売新聞社後援）は、五月八日ムクト・ヒマールの主峯、ホンデ・ピークの初登頂に成功した。

同隊は四月十一日ポカラ出発一週間のキャラバンの後、カリ・ガンダキ上流の部落ツクチェに到着。高度馴化を行ないつつ雪どけを待ちながら、ツクチェに足を停め、四月十九日よりダパ・コルあるいはその北東のピークよりヒドン・ヴァレー一帯を偵察していた。

五月八日、十三時半、ヒドン・ヴァレーからのルートによって、石坂、平山、宮原、アンテンバ、アンダワの五名がホンデ・ピークに登頂した。前進キャンプからの所要時間七時間。頂上滞留一時間、天候悪く視界きかず。持参の高度計によれば六、六〇〇メートルであった。

本ルートはアメリカ隊の狙ったルートの反対側からである。元来ヒドン・ヴァレーとは〝かくされた谷〟の意で、谷からカリ・ガンダキへの合流点は壁に樋（トヨ）をかけたように滝がかかり、登攀ルートの発見は至難と言われていたのを、ツクチェ側から入って比較的容易に登ったものらしい。

つづいて一行は五月九日トング（六二五〇メートル）に、五月十日ムクト山塊の無名峰（六三〇〇メートル）に、また五月十四日ツクチェ北西方の五九〇〇メートル峰にそれぞれ登頂、ヒドン・ヴァレー一帯を踏査した。

ユードル長官と富士に登る

○

百瀬舜太郎

箱根で開かれた日米経済合同委員会出席のため来日のユードル米内務長官が「富士山に登りたい」という新聞記事は見ていたが、その計画の内容は全く知らなかった。

登山の予定の十一月五日が近づいた頃、山梨県警察本部から「ユ長官の案内を引受けられたという松方日本山岳会副会長に聞いてくれないか」との電話を受けた。

松方さんに連絡がとれたのは十一月二日の夜、翌三日には設営のため先発の槙有恒、松方三郎のお二人、それに成瀬評議員、折井理事の各氏を富士吉田警察署で待合せて、地元として受入れの打合せをするという慌しさだった。

ただ一人、富士吉田に向って車で御坂峠を越えると、例年になく富士には雪が少ない。

吉田署で話し合った設営隊の受入れ方針は〝礼を失せぬ範囲で簡素に、天候の許す限り頂上に達するように〟ということである。県本部の遭難対策係の秋山警部補と吉田署からの応援は富士のベテラン佐藤、長坂の両巡査に明日登ってもらうこととし、富士急行に芙蓉荘使用上の希望を申し入れて署のジープで滝沢林道から吉田口五合目の芙蓉荘へ直行した。

その夜と翌日の午前中は時雨れたが、一行五名にとっては内輪だけの楽しい山小屋生活だった。午後からは内外の報道陣に前後して長官専属のシェルパとして動員されたヒマルチュリ隊の田辺寿さんと松方さんの御長男の峰雄さん、地元の秋山警部補ら三名に県岳連の丸山理事の顔も見え山小屋はにわかに騒しくなった。

主客のユ長官は夕刻二名の大使館付海兵隊下士官（白人と黒人）を伴ない到着した。

簡単な一皿盛りの缶詰料理の夕食を前にして、まず記者会見である。

「私はアリゾナの山国生れで山が好きだ。自然に親しむのはたいへんよいことだと思っている。家族は十三才を頭に六人の子供がいるが、上の三人は夫婦で近くの山へ連れて行くようにしている。自然は人間によい情操をもたらすとともに困難に負けない強い意志を養ってくれる。また現代の生活で静けさを味わうことのできるのは山だけである。」ラフカディオ・ハーンの本で富士登山を読んだ。日本は登山が盛んであり日本を訪れるに当って最高の山である富士山に登り、その国民性を知る一つのしるべとしたいと考えた。」と語った。

五日には前日のうっとうしい天候も変って、星空を仰いで明けた。ただ気温の高いことは、半日かぎりの晴天を思わせていた。

予定の五時に宿舎を出た。先頭は警察の人たち、長官には折井、田辺、松方（峰）さんとガード二名、私は松方三郎さんと前後して新聞放送関係者とその強力に雇われた一団に加わった。カゼ気味の槙さんは成瀬さんとユックリ登ってくるようである。長官は六合目付近のご来光をながめて「サンライス・スバラシイ」を連発し、その足は意外に早い。ことば通り意志の強い西部の男を目の前に見る感じである。

このあたりで一番頭を痛めたのは雪が少ないのでジュースの空きカンが目立つことで、私は松方さんに本県の高校生の間で、富士山の清掃運動が盛り上っていると釈明めいて話した。松方さんもこれ

その後、同隊は図の予定路にしたがってチューレン・ヒマールの偵察に向かい七月中旬帰国の予定である。

◇ジャヌー登頂◇

リオネル・テレイを隊長とする十四名のフランス登山隊により、ネパールの未踏峰ジャヌーが登頂された。カトマンズに到着したテレイ隊長の報告によると、登頂は四月二十七、二十八の両日で、頂上の最後の部分はほとんど垂直で空中に乗り出すような急な岩場であり、頂上は円錐形でわずか一人がやっと立てるほどであった。

◇ナンガ・パルバット登頂

◇九名からなる西ドイツ登山隊は一九五三年西独、オーストリア合同登山隊により初登頂されたナンガ・パルバット（八一二五メートル）に再度いどみ、六月二十三日、西北のディアミライ氷河から、西面よりの登頂に成功した。隊長は一九五三年と同じくカール・ヘルリックコッファー博士。

◇サルトロ・カンリ

◇ラワルピンディ五月二十二日発のAP電報によると十六名よりなる日本、パキスタン合同登山隊（日本人九名、パキスタン七名）は、五月二十二日空路スカルドーに到着した。一行は未踏のサルトロ・カンリ（七七四二メートル）に登る予定。日本隊隊長は京大の四手井博士である。

◇プモリ登頂◇

カトマンズ六月三日発UPI電報によるとG・レンサー隊長ら四名のスイス・西独合同登山隊は五月十七日未踏峰プモリ（七〇六八メートル）の登頂に成功した。

◇インド隊エヴェレスト◇

ニューデリー六月二日発ロイター電報によると、エヴェレストの第五登をめざしたディアス少佐を隊長とするインド登山隊は五月三十日高度八七一七メートルに迫ったが、猛烈なブリザードのため登頂を断念し六月二日全員でベース・キャンプに戻った。

◇　◇

本号目次

○山と私……一
○ヒマラヤン・ニュース……一
○ユードル長官と富士に登る……二
○第三次登山技術指導者講習会……四～五
○山の気象メモ……六～七
○父牛歩の思出……八～九
○米沢牛歩君をしのぶ……九
◆会員通信……一〇
◆図書紹介……一二
○台湾省山岳協会歓迎会……一三
◆会務報告……一四
一九六二年通常会員総会
○第二一九回小集会報告……一七

大測と

沢は七合目付近まで雪があったが、安全を期して夏道を往復することにした。八合五勺から雪があり、日本山岳会がわざわざ米国から長官の足形を取りよせて用意した十三文半のアイゼンが役立った。

私は歩度をのばして先頭部隊に加わり、十時には本県側の頂上久須志神社についた。長官は同十五分着、松方さんは少し遅れた。槙さんは八合目から下ったとのことである。

ここではABC、NBC、メトロをはじめ内外のテレビやニュース映画、それに新聞、雑誌のレンズの放列がユ長官に集中し、撮影のため三十分余り休憩した。長官は「ここが最高点か」とたずねたので剣ケ峰の測候所まで行くことになり、田辺さん、松方（峰）さん、白人ガードと警察の三名、それに松方（三郎）さんの依頼で私も丸山君と一行に加わり剣ケ峰へ向った。もう報道関係者はついて来そうもない。

途中賽（さい）ノ河原で長官がアイゼンを引っかけて転び、一行をヒヤリとさせたり、剣の刃渡りでは西風の突風の中をお鉢のふちを歩き、もう少し内側を歩いて下にには気を使い、長官にこのことを説明していたようである。

測候所ではここにいる職員の人たちから大歓迎を受け、あつい紅茶の接待は、寒さの中を歩いてきた長官を喜ばせるに充分だった。間もなく松方さんの二男の富士男さんが二人の若い婦人を含めた四人の仲間と追いついたので、みんなで記念写真をとったり、所長から登山記念にと富士山の油絵が長官に贈られ、すっかり元気が出てきた長官は「お鉢」を一周し正午をだいぶ回ったが久須志神社に待っていた松方さん折井さんらと下山にかかった。

長官はここで、おくれて馳せつけた報道陣から頂上到着の演出を何度もたのまれ、少しもいやな顔を見せずカメラに納まっておる。こちらはシビレを切らして先に下り出した。

この登山では予測もしなかったほど内外の報道陣がわんさと押しかけ宿舎は超満員、このため県観光課の時田君に急遽連絡して整理に当ってもらったほどである。こんなことはまず富士山開びやく以来のことだろう。

にかく長官は明朗活達な人である。報道陣の註文にはいちいち気持よく応えていた。特に感じたことは頂上で食事をするのに野外テーブルにすっかり氷が張りつめて食器の置き場もない。そこで私と田辺さんがピッケルで氷を砕いていると、長官が気さくに手伝ってくれたことだ。こんなところに共同一致してやろうという気持がよくうかがわれ、ほのぼのとした肩のこらない気安さを覚えた。

食事にしても携行してきた固いフランスパンをかじるだけという極めて質素なものちょっと日本の大臣にはまねの出来ない姿である。

三時半、芙蓉荘でインタビューが行われたが、その際には日本山岳会の人たちには勿論のこと、地元の岳連、富士吉田署の警備、芙蓉荘の接待は感謝にたえないと言い、ひとりひとりと握手を交した。中の茶屋で乗ったヘリコプターからはいつまでも手を振って別れを惜しんでいたが、自然を愛する一人の外国人と接して深く心に通うものを覚えた。

この登頂計画には幾多の制約があったにもかかわらず、特に気象に恵まれて、ユードル長官は初冬の富士に登った。小数の接待で物質的なことはなにもできなかったが、精神的な面でそれは十分に埋められたと思っている。

（一九六一年十二月記）

（山梨県山岳連盟会長・日本山岳会員）

第三次登山技術指導者講習会

（最終回）

日本山岳会

会長あいさつ

～閉講式～

日高信六郎

今年の講習会は天候の都合で、多少予定通り行かぬところはあったが、病人や怪我人も出ずに、大過なく終了したことは、ご同慶の至りである。

講師がたの講評によれば、前後三回の講習会のうちで今年の諸君がいちばん真面目で熱心だったとのこと、私も同感である上に、諸君が西穂山荘を出発のあとで、ご主人の村上さんから聞くと、山荘内外での生活態度も、出発に当っての後始末も、きわめてよかったという。私としては、まことにうれしく、心から敬意を表します。全期間諸君と起居を共にし、また今日の反省会で、受講生諸君の卒直な感想や、講師のかたがたの深い体験からわき出たことばを伺って、大いに啓発されたのは、わたくし個人としてたいへんありがたいことである。

開講式の際には ㈠山に甘えるな、㈡山を甘く見るなと言ったが、いま諸君と別れるに当り、次の三の標語をはなむけと致したい。

㈠正しい山登り ㈡いい山登り ㈢楽しい山登り。

正しい山登りとは、どんな時、どんな山に登っても、油断せず手を抜かない、慎重な山登りのことである。低い山、やさしい山に登っても、登る人の心がまえと技術が真面目であれば、いい山登り、〝立派な山登り〟といえるし、いくらむずかしい絶崖をこなし、〝氷壁〟を征服しても、それが〝山〟の一部分であり、その部分を通して〝山〟に登り、〝山〟を味わっていることを忘れては、都会のまん中で高いビルの壁をよじ登るのと変りはなく、〝いい山登り〟とは言われまい。

楽しい山登りというのは、〝余裕のある山登り〟のことである。いくら当人は楽しく、パーティが談笑の間に山を上下しても、客観的に見ると、不用意不用心で、本人たちは気がつかないうちに、遭難寸前の力いっぱい、スレスレの登山をやっているのでは、楽しい登山とは言えず、たとい血の汗を流し、死ぬようなくるしい目にあっても、リーダーに余裕と自信があり、メンバーに余力が存していれば、わたくしのいわゆる〝楽しい山登り〟の部類に入るのである。

× ×

この数日を上高地と西穂高の雪中に過して、諸君が得られたものは、何の奇もない技術と理論であり、しかもホンの糸口に過ぎないのだが、将来これをはぐくんで、さらに高く、さらに深いものに推し進めていただき度い。ここで講師との間に、疑問や意見をぶっつけ合ったように、将来も手紙のやりとりをつづけて、今度の講習を生かしてほしい。受講生相互の友情をさらに深めて、気持ちを合せめいめいが帰られたら、ここで得たところをみなさんのまわりに拡げて、全国の登山者のレベルを高め、「正しい登山によって山の遭難をなくする」と言うわれわれの念願の実現に力を添えていただきたい。

最後にいろいろお世話くださったかたがた、――設営全般にわたっては日本山岳会信濃支部の高山支部長はじめ支部のみなさん、輸送については松本自衛隊、上高地宿舎に関しては安曇村御当局、ならびに西穂山荘の村上さんに厚くお礼申上げると共に、われわれの仲間同志ではあるが、忙しいところを無理してかけつけ、貴重な数日を山仲間のためにつぶして下さった講師諸君と、人目につかぬところで設営や食料その他に、地味な骨折りを惜まれなかったかたがたに、心からのお礼を申し度い。

参加県・受講者氏名

岡山（洲崎 明・大村正行）、香川（谷沢桂三）、高知（川村早雄）、福岡A（中村正義・林 国昭）、熊本（竹下聖）、愛媛A（宮崎治芳・今井政幸）、長野（矢崎源市・太田秀春）、広島A（福田豊治・長安浄）、徳島（加藤勝康・光野明）、鳥取（田中潤一）、福岡B（桧垣高行・宮本次夫）、山口（山根良房・岡本敏・大賀茂正）、愛媛B（高津頼重・十亀茂樹）、長崎（伊東秀明・石川勝也）、福岡C（坂本直・西尾彰二）、大分（伊東亨・西諒）、広島B（寺西義夫・藤田喜徳）、松本自衛隊（徳本富士夫・遠山安夫）、臨時参加、台北市登山会（周廷旺）

編成

本部

チーフ・リーダー　浜野 正男
サブ・リーダー　片桐理一郎
マネジャー　川上 隆
サブ・マネジャー　山野井武夫
ドクター　宮本貴文・田村扇一

講師

日高信六郎、高山忠四朗、山崎安治、金坂一郎、村木潤次郎、梶本徳次郎、木村勝久

〈班別編成並担当講師〉

Aグループ講師（ ）内担当県

○酒井敏明（福岡）三室喜義（岡山）本多昭一（香川・高知）田辺寿（長野）清水英雄（愛媛）

Bグループ講師

○相沢裕文（広島）中島宏（徳島）大屋悌二（鳥取・熊本）山本健一郎（福岡）海老沼清（自衛隊）

Cグループ講師

○竹田寛次（山口）広谷光一郎（愛媛）大蔦正芳（長崎）江上康（福岡）太田晃介（大分）甘利仁朗（広島）

連絡員　小里頼忠・二木計臣・百瀬寿雄

装備、食糧、その他

○共同装備（各パーティー単位で準備するもの）

ロープ40m一本（30mでも可、太さ11mm以上、点検を十分にしてくること）。三ツ道具一式（アイスピトン一本、ロックピトン、タテ、ヨコ各2本、カラビナ3、ハンマー2）。炊事用具および食器一式（3人分）、石油コンロ一台（3人分の炊事可能なもの、燃料は委員会で用意する。石油使用のものにかぎる。ガソリンは用意しない）グランドシーツ一枚。

○個人装備

雪中幕営できる冬山装備一式（寝袋、マットを含む。但しテントは不用）。食糧（一般食糧は委員会で用意するが非常用食糧は各自二食分携行のこと）細引。

行動概要

三月一八日、浅間温泉井筒旅館にて開講式（一五、四〇―一六、四〇）、挨拶、日本山岳会長日高信六郎。準備会（一八、一〇―二〇、三〇）、講習会主旨、浜野チーフ・リーダー、登山について、山崎安治、隊編成、片桐サブ・リーダー

三月一九日（晴のち曇）井筒旅館より自衛隊トラックにて沢渡着（七、〇〇―九、一五）徒歩にて上高地村営ホテル着（一四、五五）、夕食後講義、積雪期の露営について、村木潤次郎（一八、〇〇―二〇、〇〇）

三月二〇日（曇）上高地村営ホテル発（七、〇〇）西穂山荘着（一〇、〇〇）昼食後山荘裏にてキック・ステップ、滑落停止、制 ↓

↓ 動確保の訓練、一部山荘前テント設営、泊、金坂講師説明、夕食後山荘にて講義、積雪期の登攀技術について、梶本徳次郎（一八、〇〇—二〇、〇〇）

三月二一日（雪）山荘発（七、〇〇）A、Bグループ独標付近にてトレーニング、Cグループ山荘付近にて輪かんのトレーニング。昼食後山荘前にて雪洞の研究、田辺講師説明。夕食後講義、積雪期登山の危険性（雪崩・天候・技術的事故）、金坂一郎（一八、〇〇—二〇、〇〇）

三月二二日（曇のち晴）山荘発（七、三〇）—全員焼岳登山（一二、一五—一二、三〇）—中尾峠（一三、一〇）—山荘着（一六、一〇）夕食後の講義は打切り。

三月二三日（晴）山荘発（八、〇〇）上高地村営ホテル着（九、四〇）昼食後講義。海外登山について、司会金坂一郎、つづいて反省会、司会片桐サブ・リーダー。

夕食後閉講式、講評、浜野チーフ、リーダー。挨拶、日本山岳会長日高信六郎

三月二四日（晴）村営ホテル発（七、〇〇）沢渡より自衛隊トラックにて松本駅前解散。

感想

山崎　安治

日本山岳会の西穂高講習会は、この第三次をもって無事に終了した。正しい積雪期登山の基礎を習得するというこの講習会の目的はおおむね達しられたものといってよいであろう。

もともと、場所を西穂高に選んだということは、たしかによかったと思う。いうまでもなく、西穂高というところは、日本の登山の歴史からいっても、まことに由緒のある山で登山者によって初めて登られたのが大正元年というから、すでに五十年昔のことである。

積雪期の初登頂は大正十三年の四月、そのルートは、現在の玄文沢ぞいの夏路づたいでなく、善六沢より行なっている。昭和七年の冬には慶大パーティが、いまの西穂高小屋付近で高所雪上露営を試みているが、それまで行なわれていた森林地帯における雪上露営から一歩前進し、より積極的に森林帯をぬけた吹きさらしの稜線上での雪上露営だけに、この試みにはたいへんな苦労がはらわれたに相違ない。わが国における高所雪上露営研究の第一歩がここからスタートしているのであり、それから三十年後、雪上露営というものが大いに普及し、猫も杓子も、といったようになっているが、ここまでにいたる先人の苦労というものを、こうした機会にいま一度ふりかえってみる必要もあろう。

積雪期の登山についての、基本的な心がまえや、その他、具体的な指導は、浜野チーフ・リーダーをはじめ、優秀な各講師陣によって、手をとらんばかりに指導を受けたのであるから、私としては、別にあらたまって申しあげることはない。ただ、何といっても、山登りというスポーツにおいて大切なのは、基礎となる体力であり若さである。これに強い精神力が加わった上に、登山技術というものが、本当に技術として生かされてくるのである。平素におけるトレーニングの重要性というものがここで認識されなければならないのである。

リーダーシップとメンバーシップという問題にしても、すでにものの本にいろいろな角度から記されており、ここでそれに蛇足を加えることもない。要は、全員が、予定したとおりの行動に成功し、かすり傷一つ負わずに山から降ってくるということのために全力をあげるということにつきる。そのためにどうしたらよいか、もちろん予定変更をせざるを得ない時もあろうし、天候などの理由で計画を中止してしまわなければならないこともあり得るであろう。問題は判断力であり、ただやみくもに他人の足あとばかりを追っているようなことでは、まことにおぼつかない話である。何時、如何なる場合でも隊独自の判断をもって行動する自信と、余裕をそなえなくてはならない。

今回の講習会は、冬山入門の意味で行なわれたのであり、ここで得たものの上に、さらに精進をかさね、より高く、険しいものに向って努力をつづけられるよう希望したい。と同時に、大自然の前に人間の存在などいかに無力なものであるかを忘れず、謙虚な気持で努力してほしいものである。

受講者として感じたこと

熊本県　竹下　聖

天候に恵まれず、西穂の頂を踏めなかったことは、受講生一同残念に思ったことであろうが、それは致し方のないこと。

大世帯となったこの多人数がよくまとまったことは、受講生各自がそれぞれの山岳会でリーダー格で、常日頃動いていられるからであろうし、さらに、日本山岳会の並々にならぬ準備と、そのご苦労とに頭が下がります。

伯耆大山の冬山では出来ない氷の上のピッケルワークが習えなかったことも残念なことの一つではあるが、独標の登り、鎖場でザイルをつけたのは良いが、どのパーティーも、そのままコンティニュアスで上下したのは、いささか解せない。雪の稜線を歩く、というのならいざ知らず、またザイルワークの練習というのであれば別であるが、

山に対する考え方、岩場にばかり固執するわけではないけれど、岩場に重点を置きがちな私には、巾広い視野を得たようで、大きな収穫でありましたが、さらに考えるならば、北アルプス、南アルプスと大きな山塊に常に恵まれている人たちから、阿蘇の岩場をホームグランドに持つ我々に、そういう登り方だけでは駄目なんだ、と決めつけられがちなお話には、なにか釈然としないものがありました。

それは確かに重箱の一隅をほじくるようなことかもしれませんが、それも山登りというものの一方法ではあろうかと考えますし、岩にばかりへばりついているというわけでもないのですから、ただその地域々々の特性というものがあることを、なにか忘れられているような気もいたします。

各リーダーは、常に親切で、もう何年も前から一緒に登っていたような、そんな気安さが遠方から飛び込んで来た我々には非常に嬉しく思われました。

ためになったのは雪洞の堀り方とその心構え。講義では海外遠征の話、これは最近我々の土地で、職場山岳会としてヒマラヤに行く話が出て、我々も大いに刺激されているからですが——。

金坂さんから、折角雪崩の講義がありながらも実際面で、こういう沢では、この斜面では、この雪質では、と歩いている中で、適宜何らかの指導があったならば、なお一層の効果があったように思われました。それがたとえインスタントコーヒーの味であっても、そのインスタントコーヒーを本場のブルジルコーヒーの味にまで高める橋渡しにはなると思うのですけれど、折角金坂さんが見えたのにあの話だけでは勿体ない——、とは私の慾の深さからでしょうか。

とりとめもなく書きましたが、愉しく数日を過させていただいたことを、講師の皆様に重ねてお礼申上げます。

山の気象メモ

気象庁山岳部
大井正一

私が山の気象を始めて早くも十年の月日が流れた。此の間の山の気象の普及と進歩は真に目ざましいものであり、それは多くの山の気象を愛する人々の真に血の惨むような努力の賜であることを強調したい。

一〇年前に私は測候課の鈴木君から頼まれて何気なく朋文堂のガイドブック霧ケ峯に「山の気象」と云う一文を草した。又二回程冬富士に実験に行った。この事が芳野満彦君の目にとまって冬の双子尾根登攀に誘われるままに参加してしまった。当時三八才の然も体の弱い私にとっては腰迄のラッセルと重荷、雪洞生活等は正に死ぬ思いの苦しみですらあった。私を冬富士に連れて行ってくれたのは富士山測候所の藤村所長であり、これすらも大変な冒険であり、迎えに来た所員は途中で吹倒されて負傷するし、登山者の近藤氏は墜死され、私と所長も下山の時雪煙に捲かれて死に損う有様であった。まして弱い私を冬の双子尾根に連れて行く等は正に奇想天外の試みで芳野兄弟とアルムクラブの人間性を以てして始めてなしとげ得た奇跡であった。そこで私はアルムクラブ会員となり、三峠の岩場を武内君等に引きづり上げられる迄になった。こうして私は次第に本格的に山に親む事となり、それが自づと私を山の気象に向わせる結果となったのであろう。

或日私は日本山岳会学生部会の依頼でルームで話しをした事があった。その時学習院の鈴木君と夜遅く迄山の気象の組織の話をして終電車で帰った。その直後鹿島槍で逢いましょうと主婦之友社の脇で鈴木君と別れたのは昨日の様な気がする。私がアルムクラブで鹿島槍東尾根を登った時はもう鈴木君は天狗尾根マカリ沢の雪崩の下敷になっていた。そして明十八日は鈴木君の七週忌で私がその当時のスライドをやる事になった。

その翌年私共気象庁山岳部では気象庁八〇周年記念行事として山の気象座談会を開いた。この時鈴木君の話をしたらその友人の右川君が是非山の気象を組織すべきだとの意見を出した。この時集った十五人程の人が組織としての最初の人となったわけである。その記念写真中には大井、奥山、中村等の顔も見える。この三人はずっと今日迄続けてやっては居るが是程盛んになったのは多くの人々の力である。次の年の六月に気象庁山岳部主催の下に第一回シンポジウムが持たれた。これは若し失敗すればもう止めよう位の軽い気持で始めたところが意外にも一〇〇名以上の来会者があり、一三時から二二時迄熱心な討論が闘わされて吾々主催者側は今更乍ら唖然としてしまった。そこでその後は山の気象研究会は独立して運営されるようになった。山の気象研究会はその後年四回の天気図講習会、研究会を行うこととなって今日に到っている。凡そ会の発展を左右する最も大きな因子は会報と連絡である。奥山君は自ら速記録を採りガリ版を切り、会報を印刷し、研究会等の通知をした。何だ彼だと云っても会を動かす力はこのような縁の下の実行家が生むのであって誠に人を得たと云うべきであろう。今日までに会員数は団体二〇、個人一六二を数えシンポジウムは第六回、研究会は第一〇回、天気図講演会は第三六回、気象ハイキングは第一回、中級講座は第一回を数えている。天気図講習会は一回五〇名としても一八〇〇人位が受講したことになる。縁の下の力持ちと云う点では奥山幹事が一番大変だが、その他の三〇名の委員の方々の労力も大変なものである。会場作りは文字通りの力仕事であって、折畳椅子を車に積んで運ぶような仕事が多い。名は委員でも実は人足だ。然し兎も角も此の様にしてやって来た六年間は楽しいものであった。

このように多くの人々ががむしゃらに働いている間は楽しい事で一杯である。然しこうして建物が完成すると当然色々の問題が起きて来る。これは成長の過程として止むを得ぬが悲しい事でもある。

ここで先ず起きた問題は山の気象研究会は啓蒙機関なのか、学術団体なのか、研究会なのか、趣味なのか仕事なのか、と云った問題である。学問的に見る時は記述的解析的な応用気象学であることは誰しも認めるであろうが、物理学のように帰納的、演繹的な面が欠けて居るから気象学界等から見れば最下等な分科の様に見られ勝ちであり、極端な人になると山登りの様な遊び事を学問の対象とするのは以ての外で学界から除外すべきだと云う人さえある。一方啓蒙的な面に興味を持つ人は、対象が素人だから、ラジオ天気図の描き方、雲の見方等を卒業すれば登山家としては間に合うから、それ以上深く勉強しようとする人は無くマンネリ化して止めてしまう。指導者的な人々も気象業務として何等認められていないから、公的には余計な事をする者、売名行為、趣味的でどうでもよい者と見られるし、研究心はあっても啓蒙事業に労力を奪われて研究に専念出来ない。一方山登り行為からも全く離れてしまうわけにも行かない。こう云った山の気象の複雑な性格が会にも影響して分裂騒ぎにまで発展する。立場を変えて云えばこう採める迄発展した事はそれだけの進歩とも云えるのであろう。

今日の山の気象とはどんな物だろうか。これに関して一応の解答を与えるために、山の気象研究会では「山の気象(I)」を発行して見た。

これは一般の人にも学者にも一応現状を知るのに役立つと思うが学究的の人から見ればこれでも学問か、突っ込みが足りないと云う意見もあると思う。然し是が現状なのだから仕方がない。これと同じ位の分量の論文集はもう一冊出版出来ると思う。

一方山の気象の応用気象学としての立場を規定するために応用気象学講座に「山の気象」を奥山氏と共に執筆した。これは今迄の全貌を展望したもので、論理的に順を追って書いて行った。然るに書店の方で私共の原稿を勝手に組み換え削除し、改作したので論理が滅茶々々になってしまった。此の本の目的は内容にあるのではなく。体系づけとか論理にあったのでこの主眼が失われた以上は本としての価値を失ってしまったわけで誠に残念だった。

三十年頃から都岳連でも時々私どもの講演があったが、一昨年か

ら或特定の期間登山したパーティーは必ず気象観測をして報告すると云う都岳連冬山気象期間と云った期間を四季別に作った。これは都岳連冬山気象期間報告として出版されている。三六年度からは四季別に三日づつ加盟団体員三〇〇名に各季の天気図の書き方見方の講習を行っている。これは三七年度には四日宛になる。又これと平行して読売新聞社と共催で各季一晩づつ一般大衆に対する啓蒙も行っている。何れにせよこう云った短期間の講習では山の気象を身につけて実際に利用するまでに習得することは難かしい。仮りにこれらの人々を初級者として、更に中級者としては如何なる教育をなすべきかが問題になって来る。そうした意味から都岳連では更に四日間の天気図の書き方のみの講習会を開くことになっている。

一方全岳連の方針としては指導者層を厚くして事故防止に心がけると云う方針もある。これに応ずるものとしては所謂上級者の教育が必要になって来る。こうした意味で全岳連気象テキスト(Ⅰ)(Ⅱ)を発行して、これを輪講することにより指導者を作ろうとしている。登山技術としての気象は非常に広範囲で、素人判りもし易いし誤った方針に陥り易いので、このように一定のコースにより、バッジテスト式に教えるのが一番正しい方法ではないかと思う。現在テキスト(Ⅰ)により雲と大気現象の見方を卒業した者が一四名居り、この人々に対してテキスト(Ⅱ)により空の状態、天気図の見方、指導法、遭難気象等を教える事になっている。これらの人が卒業する頃には山の気象もずっと広範な普及が出来ることになるだろう。

山の気象研究会は教育機関として専門家であるから、此の点にもいろいろと頭を悩ましている。兎も角天気図を書けと云うわけであるが、天気図が完全に描けるようになれば我事終りぬとして退会する人が多い。この書き方にしても初級講座に五期も出席する人がある。そうなると初級クラスでも始めての人や五回目の人が一緒になるので教える方にしては誠にやり難い。天気図の試験をやって、その出来具合でクラスを分ける必要があるかも知れぬがこれ又難かしい。さて我事終りぬとならないで更に進んで天気図の見方を覚えたいという人は残って行く。所が天気図の見方となると気象学全般の初歩的な知識を要するので、何から教えてよいかに苦しむ。そこで山の気象研究会では中級教室としては予想天気図の描き方実習と山への応用、雲と空の状態、遭難気象を四日間やったが是では何も得る所がないと好評ではなかった。

別に雪崩講習会として、雪崩と天気図、雪崩の分類雪崩のスライド説明、をやったがこの方が好評だった。去年の秋には土曜日の午後から丹沢山荘に行って共同炊事をやり天気図を描き、雲の講義をやり、日旺日に天気図を描いた後三ノ塔尾根を登り乍ら時々立ち止っては雲の観測と気象判断の実習をやった。この時は三十七人参加非常な好評であったが会の運行で役員には大変な労力がかかった。

日本山岳会では前に述べたような鈴木君の意志に従って学生部では着々と共同観測資料を集めているようである。然しこれには私は直接関係していないからよく知らない。

山小屋等で気象情報の収集放送等をやり、天気図や予報により登山者に警告を出してはどうかとの意見は時々聞かれるが、これは大切な事であろうが未だ殆ど手をつけられては居ない。恐らくこれは厚生省、山小屋連盟、観光課等の管理すべき仕事ではないかと思う。

山の気象の研究は如何にあるべきかについてはいろいろの意見があろう。山の気象は純然たる登山のための気象とそうでない水利気象等もいろいろ考えられるが何れにしろ応用気象の一部門としてこ数年来登場したばかりであって学問としての体系を整えてはいない。これは純然たる気象学では無いから例えばバロクリニックな運動方程式を山の形をした境界条件の下に電子計算機で解いて見た所で、それが直ちにすぐれたアカデミックな研究と云うわけには行かない。そこにはどうしても山に特有な雲とか雨とか風とか、そう云った現象の解明と予報に結びついたものが欲しい。これが純粋な気象学と応用気象学との立場の相違ではなかろうか。従って山の気象研究会も一部は気象学会の一分科として活動するが、同時に登山者と結びついて活動するのが正しい行き方であろう。

山の気象は登山者でなくては判らないものかどうか。此の問題も永らく論争されて来た。「彼は山にも登らない癖に山の気象を言うから怪しからんよ。」と云った言葉をよく耳にする。然し私はこれは一面的な言い方ではないかと思う。やはり登山と直接関連した遭難気象等になると、どうしても現場に居合せた人とか、似た様な場合の経験者とかでないと正しい批判は出来ないであろう。然し地形の影響等について気象学的な考察をする場合には登山者よりは傑れた気象学者の方が正しい判断を下せる事になる。即ち問題がどこにあるか、例えば気象学の応用を講義する場合にはその講義が正しいかどうかで登山経験の有無は問題でない。然し山の気象の実地での利用を講義する場合には登山経験のみでなく。気象利用の経験迄も必要となる。山の気象の指導者を撰ぶ場合はこの点に留思せねばならない。

次に一例を挙げて見よう。

十一月の末に西黒沢を登り、誤って本谷に入り三名中二名が死亡した事故があった。此の事故に関して当時者に聞くと次の如き反省がなされている。(1)リーダーたるべき人が急に行かれなくなった。(2)三名中二名は始めての人であった。(3)経験者の一名はガレ沢を間違えて本谷に入った。(4)他の二名が未経験なので滝を引き上げるのに時間がかかり過ぎ疲労も加わった。(5)夕方から小雪となったのに登攀を強行した。(6)会に届けてなかったため救援は望めなかった。

ところが純然たる気象学者の批判を見ると次の様になっている。(a)初冬の山にシュラーフを持たずに行ったのはいけない。(b)寒冷前線通過をラジオ天気図で予想しないのがいけない。然し此の批判は二つとも当って居ない。(a)について云うと、西黒沢ガレ沢は夜行で行けば大体十一時には稜線に出られる沢であって、シュラーフ等持たず軽装で登るのが普通であり、シュラーフ等持てば荷が重くなり却って危険である。(b)について云うと、寒冷前線は夜に入って通過して居り、それまでには西黒沢を登って上野に帰着している時分であるから、此の場合考慮する必要はなかった。即ち此の事故の批判は当事者の反省に尽きるので、後の気象学者の批判は寧ろマイナスである。これはその気象学者が自分の経験以外の範囲にまで言及したから起った誤ちである。然しその気象学者も天気図の見方等については極めてすぐれた見解を持っているから、気象の先生としては立派な人なのである。

以上五目飯的に雑多な事を述べたが、山の気象は趣味としても面白いものだから、皆さんも大いに試して頂きたい。懇親山行の中に一回位は気象天気図山行も加えて行きたいものである。

(一九六二・四・一七)

カットは茨木猪之吉氏遺作より(小野幸氏提供)

<カット説明> ペデスツリヤンは神戸徒歩会（Kobe, working,Society）の機関誌。初号は大正2年10月刊行（月刊） 図は同誌扉より採録した。バツジの図案は神戸徒歩会，ならびに阪神山岳会のもの，いずれも原寸大。

父、牛歩の思い出

米沢憲造

この度父、牛歩死去に際しましては皆様より御鄭重なる御弔文を頂き深く感謝致しますともに父の生前の御厚誼に対し厚く御礼申し上げます。何分半世紀以上に亘ります父の登山一筋に生きました記録の整理を致しますのは大変で御座いまして、何から手を付けてよいやら思案致しております。

父は明治九年八月十八日、神戸市に生れ、明治四十三年に神戸徒歩会（神戸市背の山野跋渉と毎日登山として裏山の再度山へ登ります目的で、外人のBエブラハム氏とその友人や日本人側で塚本永尭氏によって創立され会長は塚本氏でありました）に創立当時入会しその会長塚本氏辞任の後、神戸高商教授でありました岡田英定氏が会長となり父は副会長となり百名前後の会員でありましたのを父が退会致します時には千四百名近い名実共に日本一の登山会に盛りたてたのであります。

私がもの心ついて父に連れられ山へ行きましたのが大正十一年頃からでその後兄と私の兄弟が父の紹介で神戸徒歩会へ入会致しましたのが大正十二年で御座います。会では特別賛助会員、正会員、準会員とに区別されており学生の私達は会費半額の準会員でありました。手広くやって居りました父の営業も欧州大戦のパニックやその他で経営をたて直して出発しておりましたところ、私の母が私を生みました後で体が弱っておりましたところへ又弟の出産で体に無理があり、肺結核に罹りまして父は商売の苦痛と共に母の看護に懸命の努力を払ったそうですが、大正六年に我々小さい子供三人を残しまして三十才で他界致しました。その時の父の落胆ははたの見る目もつらかったそうであります。

商売も先に申しあげました如くパニックの影響で左前になっており、二重、三重の苦しみに会ったのであります。この様な事が父の山へ踏切る一番の大きな原因となり残された私共子供達の健康に留意して私達をも山へ誘った事と存じます。その後現在の母を大正九年頃と思いますが娶りまして子供達の面倒を見てもらったのであります。

私の記憶もこの頃からぼんやりながら出てくるのでありますが、当時父は神戸徒歩会の副会長でありまして自家経営の会社の約三坪程を区切って会の事務所として無償で提供し、山へ行かぬ日は朝から夜遅くまで会報の編集その他に専念し、朝一回、夕方一回と日に二回裏山の再度山（往復約八キロあります）の神戸徒歩会が建てましたコテーヂ（外人と塚本氏によって建てたものです。二十坪平屋建てで管理人の小谷と云う夫妻の人を雇ってコテーヂの管理と食事の世話や登山路の開発、修理等に働いてもらっており、広い庭に四季の花が咲き乱れ私も百回近く毎日登山をしてコテーヂを訪れましたが子供心にも懐しい想い出があり十五銭で飲ませてくれる紅茶やユーハイムのケーキの香りや味が今もって忘られません）を訪れたり会報（ペデスツリアン）が刷れますと母や私達兄弟、使用人に至るまで家族総動員で会報の発送の手伝いをして父の手助けをしました。その後会の発展に伴いまして事務所が手狭となり居留地の海岸通りにあるビルの一室に移ったり、そこも又狭くなって神戸駅近くのビルに移ったりしました。

父は会員の方が亡くなられて家族が困っているのを見て、他へ世話をしてあげたり、会員相互の親睦を計ると共に自分の事でも出来ない相談にも気持ちよく乗ってあげたりしておりました。その様な状態ですから肝心の本職の事業は傾くばかりでよく母ともトラブルがありましたが、一向におかまいなしで、ついに家業は父の妹の主人に一切を任せて大正十二年頃から舞子へ移りました。

父の登山の方は相変らず盛んで会の業務の山行はもとより間の日でも編集の暇を見ては山へ出掛けたり、当時直木重一郎様に協力して六甲登山地図の踏査に父の分担の西六甲を、それこそ獣よりも詳しいかと思う程丹念に調べて歩いておりました。私も大正十一年頃から昭和三年頃まで父に引っ張り廻されましてよく登山を致しました。私の思いますのに大正の初めから昭和三年頃までの約十五年間で父の山へ参りました日数（回数）は想像もつきませず、おそらくスキー行も含んで一年百五十日として二千二、三百回以上ではないかと思います。

山へ行かぬ時は昼過ぎに舞子を出て神戸の事務所へまいり、頭へ手拭で撚り鉢巻をして夜は十時、十一時頃まで会の事務をして帰宅はいつも午前〇時を過ぎておりましたので、私達兄弟は日曜以外に父と顔を合す事は殆んどありませんでした。父の性格も父の若い時は別として私共が分っておりますます範囲では、こと山やスキーに関しましては目も鼻もなくルック、ピツケル、靴を初め登山用具は、当時は全部輸入品であり、購入も簡単でなく、東京の川口屋、美満津、大阪の美津濃、吉岡、マリヤ（当時西岡一雄さんが勤めていたスポーツ店）、神戸の日本貿易と登山用品を扱っていました数少ない商社から高価な装具を買ってくれ、とくとくとしていましたが、山以外の事には一銭のお金も出してくれぬ程変っていました。

現在外科医学での世界的権威者であります水野祥太郎氏も中学生の頃、日曜日には朝早く神戸におりました当時の店に来られて「米沢さん行きましょう」とザイルをかついで外から大きな声で呼ばれて一緒に山へ行ったものだと父から聞かされました。

RCCの創立

また会の発展は非常なもので外人組の毎日登山を初め当時川崎、三菱の各重工業や会社、銀行の頭取、重役級、技師等の方で山の熱心な方が大勢おられ中でも藤木九三直木重一郎、三木高岑、津田周二、湯村和吉、後藤正彦、氏家竹次郎、井上延喜、岩田清次郎、寺島　重、油谷香一、毛馬新次郎、石川圭一、Bエブラハム、セオパワース、Hシェール、榎谷徹蔵、今村幸男、小崎司郎、三好毅一、中川秀夫、水野祥太郎桝田　渡、中原繁之助、小川正十郎、岡崎忠雄、沢野忠三、田口一郎、二郎、高川秀夫、山口喜吉、山路浩造、山田恒雄、服部直道、菊楽圭太郎、天野　健、松本良一、長野武之丞、真武松次、内海由平氏ら財会人を初め学校OB、現役の錚々たる人達により在阪の岳人とも協力し大正十三年に神戸徒歩会を中心としてロック、クライミング、クラブ、(R・C・C)が誕生したのであります。

父は自分は会長であり塚本、岡田両氏の後を継いで、あく迄徒歩会の発展を願い後進指導に一生を捧げねばならぬと申し、R・C・C創立後も特別な場合を除いては神戸徒歩会一本に捧げ、社会人はもとより、当時の神戸高商、神戸一中、神戸商業を初め学生山岳部の育成とビギナーの指導に懸命でありました。登山も神戸近郊のみならず足を大阪近郊へも延ばし信貴、生駒、金剛、葛城、大峯、大台、比良とその足跡は広く、年中行事として日本アルプスや八ケ岳、富士山、頚城山塊、白山登山を計画しスキー行と共に出掛けておりました。

大阪に移る

昭和五年三月に永年住み馴れた神戸を引きはらい大阪の梅田へ移りました。大阪へ移りまして兄は父の奨めで、梅田でヨネ商会の看板を掲げ山とスキー用品の専門店として開業致しましたが、不馴れなため当時、学校を出て京都で勤めていた私は兄に呼び戻され大阪へ参りました。当時大阪では山、スキーの専門店としてはマリヤをやめて好日山荘を開業された西岡さんと、影山さんの二軒のみでありましたが、兄と私は当時の大阪の実状を検討しまして、ポピュラーに動くべく、当時の今西、西堀、児島、入江、田中、山中、西島、水野、山田、関西学生山岳連盟のリーダー格でありましたOB現役の方々の御援助や御指導と住友山岳会、O・K・T、雪線社、アルコウ会を初め各方面の御援助や西岡、海野、島田、片桐、酒井の各氏等業界関係の御指導や輸入元、製造業者の協力を得て出発致しました。

話は変りますが、父が神戸徒歩会の会長を辞任し退会してまで大阪へ移りました事について初めは兄が商売を始めるのについて地理的に大阪が有利のため家族が大阪へ移ったものと思っておりましたが、それにしてもあれ程一所懸命にお世話をした神戸徒歩会を退会までして大阪へ移ったのが不思議でなりませんでしたが、神戸時代から父と親交があり、父について大阪へ来られました会員の方から聞かせて頂いて、会の一部の方とトラブルがあり、それが原因で辞退したとの事で、そのトラブルとは父が神戸徒歩会より毎月手当として、なにがしかの報酬を受けていたのですが、「日本に登山会は数多いが月給を取っている会長は米沢ぐらいだ。」と批難を受け会の財政に干渉した方達によって父を排斥したのだとの事で、それを聞きました私も、なる程登山会で月給と云うと聞こえは悪いですが、事実それに違いありませんが、当時役員でありました毛馬新次郎氏を初め皆さんから、米沢が私費で事務所を提供したり事務員の費用の不足を援助したり、舞子から毎日手弁当で年中事務所へ通って当時のお金にして毎月二百円近いポケット、マネーを会のために使っているのを見るに見かねて、皆さんが相談されて父に費用の一部としての報酬を出されたもので父も極力辞退し、私共も辞退するよう話したのでありますが、皆さんからたっての懇望で止むを得ずお受けしておりましたもので、父もこの様なことが原因で永年自分の子供より大切に守って参りました神戸徒歩会の会長を辞し退会しました事は、かえすがえすも残念であり、断腸の思いであった事と子供の私にとりましても感慨無量で御座います。

米沢牛歩君をしのぶ

藤木九三

関西岳界の長老米沢牛歩君（本名政吉君）は、去る三月六日、八十六歳の天寿をまっとうして逝去した。氏はもと神戸に在住し、三ノ宮神社の近くでヨネ商会を経営し、自動車やオートバイの輸入販売をするかたわら、当時神戸の内外人で組織していたKWS（神戸徒歩会）の有力なメンバーとして活躍していた。そしてその頃盛んだった六甲、摩耶をはじめ、再度（フタタビ）、高取などを舞台に展開された毎朝登山や、週末山行団体の元締め格として重きをなし、会報「ペデスツリヤン」の編集発行などを一手に引きうけ、大正末期には塚本永堯氏の後を継いで会長となった。そして第一次RCCの発足に際してはオリエンタルホテルの支配人だった毛馬新次郎、直木重一郎、三木高岑、後藤正彦らの諸君とともに馳せ参じて重きをなした。

当時、神戸の裏山にはKWSのカテージがあり、週末にはよく同志が集り、小屋そなえつけの、その頃としては珍らしいアーサービルの登山綱や、本場のアルプスの氷河にステップを切ったアイスアックスを持ち出したりして、岩登りやスキー登山について議論をたたかわしているうちに、いつしか近代登山への機運がたかまって行ったのだった。

こうした道程をたどって、ヨネ商会は昭和五年に大阪に移り、梅田の阪急に近い北区茶屋町三十三番地に居を構え、子息の憲造君を表面に立てて、山とスキー用具の専門店の看板をかかげ、別に阪神山岳会を設立してその会長となりあいかわらず持ち前のねばりと、誠実さで、若い岳人の指導にあたったものだった。

かってはJACのメンバーでもあり、特に邦人として南ア方面のパイオニア・ワークに活躍し、その鳳凰山のファイナル・ピナクル（地蔵仏）の登頂は、ウエストン・ドーントにつぎ、第三番目のものだったといわれる。また中国方面では氷の山、蘇武岳などのスキー登山などの開拓などにも参劃したパイオニアのひとりでもあった。

世に「名は体をあらわす」ということわざがある。じっさい米沢君ほど、〝牛歩〟そのままのニュアンスに徹した岳人は、おそらく今後も出ないかも知らぬ。

阪神山岳会は昭和5年6月創立

石井鶴三

会員通信

ロッキーの旅

織内信彦

アルバータ州のカルガリーから油を流したようなハイウエイを一〇〇哩、飛ばしに飛ばして山の部落バンフへ来ると、道の両側に屏風を回らしたようなロッキィの岩壁が、雪や氷をつけて押しかぶさるように迫ってきました。僕はこのバンフの部落から更に五〇哩ほど北にあるレイク・ルイズまで足をのばして氷河見物をやりましたが、湖畔は五月だというのにまだ一尺余りの積雪、マウント・ビクトリアからそぎ落したような岩壁の厚い蒼氷が至るところに望まれました。そして湖畔近くまでビクトリア氷河が続いているのはちょっとした壮観でした。

右手のマウント・ホワイト、左手のサドルピークと整った山容はさすがカナディアンロッキーだと、しばし息をとめて眺めてきました。

パンフへ戻ってきてカフェーテリヤでコーヒーを飲んでいると、往来にブーブーけたたましい音がする、何事ならんと飛びだしてみると、これが教会から戻って来た花嫁、花むこの車の行列で、若い二人を祝福するために、車が一斉にクラクションを鳴らして村中を練り廻している。そしてその背景にはかぶさるような岩山と雪と独特の教会の尖塔とがおあつらえ向きに揃っていました。

モントリオールを最後に、カナダの旅を終ってからニューヨークに出ましたが、愈々ニューヨークを引き上げるという前日の夕方、中央公園の付近にあるアメリカ山岳会のルームを訪ねて、立派なライブラリーやミューゼアムを見せてもらい、セクレタリーのモナハン嬢としばらく四方山話をやってきました。

例のオバーリン氏がアルバータから持ち帰った日本隊のピッケルを見せてもらいましたが、ピックやアックスの部分はよく手入れがされていて錆一つなかったことは大変気持のよい思いをした次第です。シャフトは繊維の部分がゴツゴツと浮き出していました。これは二十数年アルバータ山頂の風雪にさらされた結果なのだろうと思います。シュピッツェの少し上部からこのシャフトは折れていました。

来室者名簿に署名をしようとパラパラめくってみると、僕の一頁前に吉沢一郎氏の筆蹟を発見してなつかしく思いました。

（五月十五日・ワシントンにて）

春山二つ

望月達夫

余市岳

札幌近郊では一番高い余市岳へ雪のあるうちに登りたいと、この辺の山にくわしい相川修さんに誘いをかける。四月二十二日快晴。この行に加わったのは井手貴夫、藤井運平、高沢光雄と僕との合計五名。すべてJAC会員であったのも愉快だ。

白井二股から左股川の馬橇道をスキーを肩に奥へ奥へと辿る。途中、ヘソまで見えんばかりにシャツをはだけた巻ゲートル姿の井手大人に、行きずりの登山者がおそれをなしたか自然に頭を下げた一幕あり。橇道の終点近くで目の前に余市岳を眺めながらゆっくり弁当を開く。そこからスキーをつけ高原状のゆるい登りを行くと、数時間前のらしいクマの足跡を見る。余市北東のコルをへて、やや急な尾根を登り、ハイ松がわずかに顔を出している頂に達した。登り口から五時間余。

快晴に恵まれたのだから眺望のよかったことも言うまでもない。雪の中で冬を越したコケモモの赤黒い実を三つ四つ口に入れる。下りはよく滑って随分ゆっくりおりたのだが、最終バスには小一時間も余裕があった。

狩場山

伊藤さんの『北の山』で読んだかすかな記憶のあるこの山へ、五月初旬の連休に行こうと云って来たのは橋本誠二君だった。五月三日朝、札幌駅を立ったのは、高沢光雄、石崎貞子二君を加えた都合四人。黒松内乗替、寿都からはバスで島牧の千走で下りたのは午後二時四〇分。バスのなかからすでにおおらかな姿を見せていた狩場山塊は、予想にたがわずまだ豊富な雪に包まれていた。

千走温泉（地図の湯ノ沢）までの六キロは、三分の二をトラックに便乗。宿はまさに野中の一軒家で、客のないときは農業、湯舟の底から赤茶けた湯がボコボコと＊

米沢牛歩氏の追憶

直木重一郎

米沢氏は此春八十六才のご高齢を以て、忽然として此世を去られましたことは、まことに哀惜の念に堪えません。氏は平素頗る頑健で八十二才の時乗鞍岳に登られたと聞いています。氏の永き一生は山に始まり山に終った、と言えましょう。

世間では往々自己宣伝したがる人が多いものですが、氏は専ら若き山人を育てることを何よりの仕事として十分満足していられたようです。関西の登山につくされた功績はまことに大きいものがありまして、氏を失ったことは大きな損失です。

戦前神戸徒歩会（KWS）の会長時代には、例会に欠席したことがなく、常に若人達の指導を熱心にやって居られ、同会をあれほど盛大にせられた業績は偉大なもので、山でのリーダー振りと事務整理には全く頭が下ります。

大正の末期KWSでは氏の犠牲的功労を感謝する記念事業として、六甲三国石より若草山に至る約三Kの山路（阿弥陀塚道）を米沢道と命名しました。今日ではドライブウェイのためこの山路は寸断せられ昔の面影を失っているのは

＊湧き出ていて、まだランプという、まことに野趣横溢した宿であった。

翌四日は時々雨で、賀老台地の奥まで下検分に出かけた。湯宿の前で千走川をわたる吊橋がおちているため、ヤブコギをやるので、台地へ出るには三〇分ばかり余けいにかかることを知った。

五日は早朝から天の一角が明るいので、急ぎ仕度をして六時一〇分に宿を出た。賀老台地まで登ると、東狩場山からフモンナイ岳へかけての稜線が眼前に横たわってまず目をひく。曽て伊藤さんが泊った賀老の駅逓はすでになく、その跡がわずかに知れるだけである。このあたりから雪の上をゆく。昨日休んだ飯場の廃屋の前で小休止、目の前に東狩場の頂を眺め、地図上東狩場の東側に二個所記入されている岩記号の間の沢を登路とすることにきめる。幸い、この頃から空もすっかり晴れわたった。

しばらくゆくと真新らしいクマの足跡、しかし終日クマの姿は遂に見られなかった。ゾンメル・シーをつける。やがて路をはなれ、目的の沢を目ざして白樺の疎林をわけてすすむ。わずかに流れの現われた千走の源流をわたり、恰好の大岩を見つけて弁当をひらく（九・三〇―一〇・一〇）。

沢は思ったより勾配はゆるく間もなく東狩場の南尾根に出た。既に樹林帯を脱し、Tと僕は目立つ岳樺の根本にスキーをデポした。天気は素晴らしくよく時間もあるので、是非本峰までゆこうと、東狩場をまくつもりで進んだが、その南側は地図でも判るように急斜面やむなくTが先頭にたってキックステップで登りきった地点は、殆んど東狩場の三角点だった（一二・一〇）。

大平山からメップ岳へかけての山々が目の前に展開される。狩場の主峰は堂々と大きな姿を構えてますますわれわれをひきつけた。

すこしハイ松をこいでフモンナイへの分岐点まで下ると、そこは思いもかけない広々した雪の斜面一服して最後の登りにかかる。途中に小さなコブが二つあったが簡単に上下し、最後の斜面を登りきると、最高点までゆるやかなけがれない雪面がつづいていた。一時四〇分、四人は頂上にたった。

西側は急降下して痩尾根つづきに前山につらなり、北へ廻ってオコツナイ岳を隆起させ、巾広い南尾根はゆるくさがって、その彼方にカスベ岳が、また遥かに遊楽部岳が聳えていた。フモンナイの西壁は見ごたえがあり、東狩場の彼方には後方年蹄山やニセコアンヌプリから雷電への山波が見えた。

ハイ松の蔭で三〇分程休んで下降についた。Hは流石に見事な滑降ぶりを示して頂上からスキーで下った。往路休んだ大岩で再び休み（三・四〇―四・一〇）みちたりた気分で賀老台地の長い一本路を辿った。雲が静かに谷にしのびこみ、狩場の雪の面が夕日に映えて美しかった。アイヌネギ、カタクリなどの山菜を摘んで宿に帰ったのは七時。

六日、朝のうち小雨があったが間もなくうららかに晴れた。九時近く千走温泉を去り、千走から蘭越までの直行バスに乗った。途中歌棄、磯谷など、追分節に残る昔栄えた漁場を通り、遠くに雪の山を眺め、目の下に海の景色を賞して、あきない三時間半のバスの旅を過した。蘭越からは後方羊蹄山やニセコの山々が鮮かに見えたが狩場を眺めつくしてきたわれわれの目には、むしろ魅力ないものにさえ思われた。（一九六二、五月）

カトマンズ便り

神原　達

ネパールに三月二十九日にまいりました。東京のせわしさに比べカトマンズの空気はやはり私にぴったりするようです。前に知りあった多くの友人に再会し、皆心温かく妻をも迎えてくれました。P・Mシンさん（薬屋）、又カイザー元帥の所にもまいりました。ナラ、シャムシェル等にも逢い少しづつ当地の社交をはじめています。登山隊の人たちもそれぞれ家に来られましたが、今は皆山に入っていられます。あと一ケ月もすれば荷物もとれ新らしい家に入ることになりそうですが、何しろ二～三年、又はそれ以上ネパールにいることになりそうで、のんびりとかまえています。あまりのんびりしすぎて妻がいささかやきもきしていますが、しかしその内にこちらの時間に慣れることでしょう。中尾先生等と一日カカニまでハイキングに行き、ヒマラヤを見てきました。時々テントを持って行ってきます。ヒマラヤの山麓には今秋か、来春に行くことになりましょうが、当地の様子又お手紙差上げたく存じます。P・O・ボックスが左記に変りました。

P.O. Box No. 90, G.P.O.
KATHMANDU, NEPAL.
（四月十三日付松田雄一宛）

日本山書の会の結成

会員川崎隆章氏らにより日本山書の会が結成された。事務所江戸川区平井三ノ一、一七八　斎藤一男方

まことに惜しいです。

私が初めて氏を知ったのは、大正二年八月（一九一三）、KWSの例会木曽御嶽行のときです。私は神戸二中（現在の兵庫高校）の生徒で、当時氏が熱心に世話してくれていたことを記憶しています。

登山家の中には相当変った人が多いようです。米沢氏も亦その例に洩れず色々な逸話を残されています。大正の末、KWSの槍ケ岳登山のとき、友人K氏は途中高山病に罹って小屋で横になっていると、米沢氏が何と思ったのか持ってきたローソク全部に火をつけて枕元に列べカンズメまでおかれたので口惜しいやら情なかったそうです。

大正十四年にKWSの猛者連が神戸スキークラブを設立したとき米沢氏曰く「スキーは登山の邪道である。」と散々にけなされましたが、その後どういう風の吹きまわしか、昭和の初頃KWSにスキー部を設けて大いに奨励せられたことがありました。

思い出はこれくらいにしておきましょう。さだめし地下で聞いて居られる氏は、独特のクセである片手を口元にあて、ウオ……と言いながら、目を細め、目尻を下げて陽気に笑って居られることと思います。ご冥福をお祈りいたします。

図書紹介

石井鶴三画

蝦夷日誌

松浦武四郎著
吉田常吉編

江戸末期の傑出した探検家松浦武四郎の業績については、いまここで小生ごときがあらたまって述べるまでもないことである。今回時事新書として上下二巻にわけて発行された本書は、上巻が東蝦夷日誌、下巻が西蝦夷日誌としてまとめられている。これは松浦武四郎が蝦夷地の探検で書き残した日記十四冊を後になって抄録し、絵画をそえて出版した「東西蝦夷山川地理取調紀行」十部二十二冊のうちの二部十四冊である。

蝦夷地の海岸にそった道筋や河川について跋渉調査したもので、探検紀行として興味深いばかりでなく、学術的価値もきわめて高いとされている。

こういった書物は、最近なかなか入手しがたいものとなっているが、今日新書版として手軽に手にすることができるようになったことは、まことに有難いことである。とくに編者の厳密な校訂と、解説がくわえられ、蝦夷地の歴史、松浦武四郎略伝、「東蝦夷日誌」「西蝦夷日誌」について、地名に現われる蝦夷地の意義の四編は本書の理解を一段と深めるものである。

松浦武四郎はこのほか多くの書物を書き残しているが、有名な石狩日誌、天塩日誌、夕張日誌、後方羊蹄日誌など一連の探検紀行も何らかの形で再刻してほしいものである。

（山崎安治）

昭和三十七年一月時事通信社発行、上巻三五一ページ、下巻三三四ページ、定価上下巻とも二百四十円。

川喜田二郎・高山竜三著
ヒマラヤ
—秘境に生きる人びと—

わが国でヒマラヤの本はたくさん出たが、大ていは登山記あるいは旅行記である。日本出発前の準備から、メンバー、資金、航路、上陸、キャラバン、という風に、叙述の順序がきまっている。

ところがこの本は、そういう紀行的なことはいっさい書いてない。いきなりヒマラヤに住む人びとに触れている。そこが今までのヒマラヤの本と変っている。

それから多くのヒマラヤ登山記では、当然挿入の写真は山岳を主としている。ところがこの本では山よりも人間に関する写真が多い。カラー写真は実にみごとである。その中に、人か造営物か、耕作地か、何かそういう人間臭の現われていない写真は殆んどない。たとえ氷雪の峰の写真はあるにしても、その前景に、ヤクを追う牧人の姿が配されている、といった風である。そこも今までのヒマラヤの本と変っている。

ヒマラヤは山もさることながらそこに住む素朴な人びととの交わりが楽しいとは、ヒマラヤへ行った人たちの等しく口にするところである。彼等は日本人には親しみ深い。顔も似ている。しかし登山隊は山が目的だから、大ていはその現地民と行きずりの親しさで別れてしまう。

ヒマラヤの山村にジックリ腰を落ちつけてその人たちを調査したのが川喜田二郎氏である。川喜田氏の二度のヒマラヤ行のおもな目的はそれであった。その学術的な報告はすでに発表されているが、今度出た本は、われわれ素人にもよくわかる易しい本である。読むより見ることを主眼とした写真が多い。その美しい写真を見ていると、ヒマラヤへの旅情が胸にあふれてくる。

（深田久弥）

カラーブックス①、文庫版、一二七頁、二〇〇円、保育社発行

〈本評は37年4月23日、週刊読書人より転載した〉

細川沙多子著
「女六人ヒマラヤを行く」

一昨年八月に出発、十一月に帰国したインド・パンジャブ婦人親善隊の隊長細川沙多子さんの旅行記である。

細川隊長ほか五女性の一行は山友達で、渡印の目的は、パンジャブ・ヒマラヤのデオ・チバ登頂だったが、渡航外貨の割り当てを受ける関係から親善隊の形をとった。

一行はカルカッタ、ナガールを経て、セリーにベース・キャンプを設け、有名なガルツェン・ノルブの先導で、デオ・チバ登頂に成功した。その後一行はダラムサラで十四世ダライ・ラマ、ニューデリーでネール首相と会見したほかインド各地の庶民生活に触れ、老幼男女と語り合ってきたのだから親善隊の名は決して外貨を得る方便にはとどまらなかったわけである。

高山の征服に当たっては、最後のアタックの苦労もさることながら、山にたどりつくまでの準備の

中華民国台湾省山岳協会訪日友好登山隊歓迎会

四月二十一日（土）午後五時より体協会議室に於て、台湾省山岳協会より日本へ派遣の蘇梅熠団長他十名を囲んで、和やかなビールパーティーを開催した。日高会長の歓迎挨拶、蘇団長の隊員紹介、並びに挨拶、槙名誉会員の乾盃の後同協会周百錬会長より日本山岳会に贈られた「官灯」や台湾原住民族のタイヤル族使用の「山刀」、「首飾り」（タイヤル語でカアハアーといい貨幣として使った）等珍品の説明、共同声明の発表などがあり、打ち解けた交歓会であった。尚パーティー終了後、図書室に於て、玉山（新高山）の映画を同隊員の説明で鑑賞して解散をした。

訪日登山隊、蘇梅熠、余初雄、紀林全、荘国章、陳建地、鄭丁塗曽耀麟、郭光仁、林陳査菜、鄭林阿却、鄭清玉

出席者　日高信六郎、槙有恒、中島伊平、青木昇、小野利次、折井健一、山下一夫、柴田晴彦、高木菊三郎、藤島敏男、中保、浅井

苦労が大変である。そこでこの旅行記が、出発までの準備、ベース・キャンプにいたるまでの道中に大きなスペースをさいているのも当然だ。

女ばかりの一行だから出発準備にも、山にたどりつくまでの長旅にも、男以上の困難が伴うが、男にはない女の知恵が発揮される場面もないではない。

細川さんはいかめしい隊長という重責をになったが、奥さんであり、母親であるのに似つかわしく一行の健康状態から、日々の心の動きにまで、こまかな注意をおこたらなかった。

この旅行記も、男性が気づかずに見のがしてしまうような身辺の雑事まで記録されている。「出発まで」の章の、携帯品についての驚くべき周到な準備、「登頂前の緊張」の章の、アタック・メンバーをきめる一行の違和感など、男性の登山隊でもあることだろうがこれほど生々しく、キメこまかに描いた記録はなさそうだ。

とくに興味深いのは巻末の付録で、携行食糧、装備、遠征費の一切、つまり親善隊の〝家計簿〟を公開したことで、これからの遠征隊の貴重な資料になるに違いない。遠征費は、四百五十一万七千九百三十円であったが、一行の成果から見て安いものだったといえそうである。

著者は「女性であることを意識しないで」遠征したというが、筆に女らしさがあふれている。

（朝日新聞社、B6判変形二一二ページ、二三〇円＝本評は四月七日号、〝週刊時事〟より転載した。）

女五人ニュージーランドを行く

佐藤テル編

私は彼女等のほんの数ケ月前に同じような経験をし、同じようにクック山に挑んでいた男三人のグループの一員として、感想を述べさせて頂く。

私たちの旅行は全く個人的なものではあったが、それでも各地で一目日本人を見ようとやって来て、大歓迎をされ、「今度来ることになっている女性パーテーとは別なのか」と質問された。彼女らが来ることは相当前から全国に知れ渡り、各地で歓迎の準備をしていたようだった。だから彼女らの言うニュージーランド・ホスピタリティというものが全く懸値なしのもので、オーバーとさえ言えるほどの歓迎に日毎夜毎攻められ通した話にも身をつまされる。彼らは勿論善意でやってくれるのだろうが、山登りを後にひかえている我々にとっては、山を見るまでは余計なことに体力を消耗したくないという気持であった。

ともあれ、日本ではなかなか得られないニュージーランドの旅行の手引としても、この本は非常に価値がある。「地理大系」等という本に出ている無味乾燥なものと違い、実際に自分の経験と見聞とによって書かれたものだから温か味がある。旅行者が感じる彼の国のよい点、悪い点を正直に書いているのが好ましく、人々の考え方などもうかがい知ることができて面白い。私自身、ニュージーランドという国は、日本の次に他人とは思えない国と感じているが、終りまで楽しく読めたのはうれしかった。

終始、ニュージーランドへの愛情を以て進められている彼女らの筆をニュージーランドの山々へもう一歩進めて、詳しく紹介してくれたらさらに完全なものとなったと思う。そうすれば山好きの連中にも有益な本になったであろう。この本の中に場所は求められないとしても、こうして日本の山登りと彼の国のそれとの交流を通じて、今後少しでも日本の国の遭難を少くすることは、多くの人々の善意に支えられて外国の山を経験できた我々の、また彼女らの努めであると思う。

本題から離れたが、この女五人の「小さな外交官」達は、本物の外交官が四年かかってもできないほどの親善の旅をわずか四ケ月で果してきたわけで、全くすばらしいことである。（宇田川允敏）

（B6二八二頁、三五〇円、実業之日本社）

本会所蔵　辻村伊助自筆稿本
〝スウイス日記〟外函蓋の意匠
原　寸　28.0 × 20.5 cm,
材料チーク材使用，焦茶色
木彫・佐藤久一朗
（制作．1950年春）

◇日本山岳会蔵書目録◇

—和　書—

昭和37・3・31現在による本会の蔵書目録が完成した。戦後はじめて作られたもので全27頁。はじめに本会独自の分類表がつけられている。

共同声明書

此の度、中華民国台湾省山岳協会親善登山隊の訪日を機会に、同国の登山界を代表する台湾省山岳協会と社団法人日本山岳会とは、今後益々相互の連絡親睦を計ると共に両国岳人の交流を活発にし、それぞれ登山を通じて広く両国の山岳愛好者の理解を深め且つ両国の親善の増進に務めたいと思います。

一九六二年四月二十一日

中華民国台湾省山岳協会
訪日友好登山隊

社団法人　日本山岳会

秩夫、神谷恭、浜野正男、高山忠四朗、国見利夫、百瀬舜太郎、松本熊次郎、渡辺公平、津田周二、宇田川允敏、野口末延、井口正男、鈴木郭之、太田　敬、石原憲治、磯野三郎、山本朋三郎、山崎安治、相沢裕文、陳光漢、村井米子、交野武一、今井雄二、西丸震哉、関口周也、織内信彦、川上　隆、山口国俊、浜岡造、勝田房治、富田美知子、芳野赳夫、辰沼広吉、大森明恍、北原春子、山口節子、石井一清、坂倉登喜子、三枝礼子、以上五〇名

佐藤久一朗

会務報告

四月理事・評議員会

五日・ルーム

▽理事浜野、折井、太田、山崎、川上、田村、徳久、古沢、中島、監事松本、評議員神谷、深田、織内。

委任出席渡辺、藤島敏、交野、伊藤秀、藤井、津田関西支部長。

▽議事と報告

①三十七年度会員総会について（折井）

〔期日〕四月二十一日（土）東京支部一時三十分より、本部は二時より

〔報告〕六一年度の行事報告、および決算報告。

〔議案〕

。一九六二年度予算案付議の件

会長、副会長、定款改正、会費入会金値上げの件

。理事改選の件、新理事として辰沼広吉、皆川完一、竹田吉文以上三名を選任、松本監事は再任。

。今年度に限り地方支部に一〇〇円を還元する方法を講じたい。

②中華民国台湾省体育会山岳協会訪日について（折井）

・神戸に七日頃着く予定。富士山八ッ岳、北アルプスの山に登る計画。（12頁参照）

③韓国山岳会より装備展示のための用具借用の要請について（折井）

・本会として出来るだけ援助する。竹田吉文氏に託す。杉道助氏並びに共和運動具製作所竹内社長よりも援助につき賛意あり。

④富士山頂気象観測所所員の疲労調査について（田村）

・報告書完成よろしくお願いする

⑤図書について（徳久）

・分類の整理が了った。今後もご協力をお願いしたい。

⑥第三次登山技術指導者講習会について（川上）

・期日、三月十八日―二十四日

・場所、北ア西穂高岳周辺

・参加受講生三十五名、講師連絡員三十二名。（4頁参照）

・全国を三ブロックに分けて行った本講習会も今回を以て終了、今までのうち今回が一番真面目だった。しかし雪にはなじみが薄いせいかバランスの点はレベルが低いように見受けられた。来年は年間を通じて新しい方針の下に、海外登山についての諸研究を行う予定

一九六二年 通常会員総会

四月二十一日（土）午後二時より体協会議室に於て開催された。

総会次第

会長挨拶　日高会長

報告事項

一、一九六一年度事業報告　折井理事

二、各支部の報告（支部出席者）

(1)関西支部　津田支部長

(2)石川支部　磯野副支部長

(3)富山支部　中田支部長

(4)信濃支部　高山支部長

(5)山梨支部　百瀬舜太郎氏

(6)静岡支部　山本朋三郎氏

(7)越後支部　藤島支部長

三、一九六一年度決算報告　太田理事

付議事項

四、定款改正の件（入会金、会費値上げ）　太田理事

五、一九六二年度予算案　太田理事

六、会長、副会長改選の件

七、理事改選の件

八、監事（一名）改選の件

閉会の辞　折井理事

▽各議事は凡て満場一致を以って可決された。入会金（三千円）会費（東京・神奈川・千葉・埼玉在住会員、一六〇〇円、其他一二〇〇円。終身会員、一〇万円但し入会後二十五年以上の会員は五万円）の値上げについては、特に会員各位の深い理解により可決されたが会の運営については更らに活発を期したい。

今般、会長を退任された日高信六郎氏に対し、槙名誉会員より会員の総意を代表した謝意と慰労の辞があり、緊急動議として浜野理事より、日高前会長を評議員に推薦したいとの提案があり、これを可決した。

尚、近日中に上高地山荘の開設見透しがついたので、会員各位の便に供する旨の報告があった。

× ×

▽出席者　青木昇、小野利次、安彦六郎、今井喜美子、近藤茂吉、槙有恒、日高信六郎、山下一夫、折井健一、関口周也、冠松次郎、野萩守、柴田晴彦、中保、岩佐吉雄、高木菊三郎、佐藤隆太郎、下条富弘、阿達憲、浅井秩夫、神谷恭、浜野正男、高山忠四朗、国見利夫、吉田竹志、百瀬舜太郎、松本熊次郎、沼倉寛二郎、渡辺公平、津田周二、今井雄二、織内信彦、宇田川充敏、野口末延、井口正男、村上昭三、川上隆、鈴木郭之、中田勇吉、太田敬、松田雄一、石原憲治、磯野三郎、斉藤武、山本朋三郎、山崎安治、相沢裕文、藤島玄、陳光漢、村井米子、交野武一、斉藤平七、西丸震哉、杉山桂吉、中島伊平、以上五十五名、他は委任出席。

一九六二年度理事

会長　松方三郎

副会長　三田幸夫（兼編集一般）

〃　渡辺公平（協会・支部）

常務理事

〃　浜野正男（企画・遭対）

〃　折井健一（総務・海外連絡）

〃　山崎安治（指導）

〃　辰沼広吉（調査・研究）

〃　川上隆（総務・集会）

〃　中島伊平（経理・集会）

理事　古沢肇（会報）

〃　木下是雄（調査・研究）

〃　皆川完一（山日記）

〃　金坂一郎（指導）

〃　村木潤次郎（海外登山）

〃　徳久球雄（図書）

〃　高橋進（指導）

〃　日下田実（指導）

〃　田村扇一（調査・研究）

〃　田辺寿（指導）

〃　竹田吉文（総務）

× ×

なお監事一名は、松本熊次郎氏を再選、評議員については、前会長日高信六郎氏を推薦、他は前年度の通りとする。

昭和36年度収支決算表

36.4.1—37.3.31

科目	収入の部 予算	収入の部 決算	予算に対する決算増減	科目	支出の部 予算	支出の部 決算	予算に対する決算増減
経常収入	1,460,000	1,936,900	476,900	事務費	801,000	752,164	48,836
入会金	160,000	269,700	109,700	俸給	250,000	254,000	△ 4,000
会費	1,300,000	1,136,200	△ 163,800	文具費	27,000	24,704	2,296
旧年度会費		479,600	479,600	印刷費	120,000	90,582	29,418
次年度会費		51,400	51,400	通信費	350,000	358,605	△ 8,605
				交通費	24,000	24,273	△ 273
				予備費	30,000		30,000
				管理費	191,000	130,608	60,392
事業収益	637,000	1,642,096	1,005,096	火災保険料	10,000	11,250	△ 1,250
				営繕費	20,000	10,690	9,310
会報広告料	35,000	34,300	△ 700	諸税組合費	27,000	6,200	20,800
山岳広告料	150,000	161,000	11,000	光熱費	37,000	33,724	3,276
山日記 a/c	270,000	1,268,090	998,090	電話料	67,000	68,744	△ 1,744
会員章売上	7,000	3,300	△ 3,700	予備費	30,000		30,000
山岳売上金	20,000	20,030	30	事業費	1,105,000	1,294,945	△ 189,945
利息	80,000	85,396	5,396	会議費	50,000	17,760	32,240
雑収入	50,000	30,600	△ 19,400	交際費	30,000	16,650	13,350
寄附金		22,900	22,900	図書費	100,000	146,825	△ 46,825
貸室料	25,000	16,480	△ 8,520	会報出版費	180,000	281,158	△ 101,158
				山岳出版費	500,000	587,322	△ 87,322
				調査研究費	50,000	51,524	△ 1,524
				備品費	25,000	29,240	△ 4,240
				指導費	100,000	48,285	51,715
				予備費	30,000		30,000
				雑費	40,000	49,697	△ 9,697
				振替手数料		13,425	△ 13.425
				上高地山荘		53,059	△ 53,059
				剰余金		1,401,279	
合計	2,097,000	3,578,996	1,481,996	合計	2,097,000	2,177,717	80,717

社団法人日本山岳会，昭和36年度収支決算表及財産目録につき監査致しましたところ，その正確なることを認承致します。

昭和37年3月31日

会計監事　野口　末延　　同上　松本熊次郎

財産目録

基本財産	金額	備考
貸付信託	100,000	

運用財産	金額	備考
建物	1,540,000	
什器備品	250,000	
図書	650,000	
銀行予金	1,025,311	
貸付信託	1,290,000	
金銭信託	109,681	
振替貯金	76,562	
現金	68,763	
小計	5,010,317	
合計	5,110,317	

基金	金額	備考
遭難対策基金	64,375	
図書基金	11,450	
図書室基金	113,100	
合計	188,925	

昭和37年度収支予算表（案）

収入 科目	収入 金額	支出 科目	支出 金額
経常収入	2,150,000	事務費	880,000
入会金	150,000	俸給	300,000
会費	2,000,000	文具費	30,000
		印刷費	150,000
		交通費	26,000
		通信費	374,000
事業収益	902,000	管理費	292,000
山岳広告料	200,000	火災保険料	12,000
会報広告料	35,000	営繕費	148,000
山日記 a/c	500,000	諸税組合費	27,000
貸室料	15,000	光熱費	35,000
利息	100,000	電話料	70,000
雑収入	32,000	事業費	1,880,000
山岳売上金	20,000	会議費	50,000
		交際費	40,000
		図書費	120,000
		会報出版費	270,000
		山岳出版費	600,000
		調査研究費	50,000
		備品費	40,000
		指導費	100,000
		上高地山荘	150,000
		東京支部費	70,000
		雑費	90,000
		臨時費	100,000
		予備費	200,000
合計	3,052,000	合計	3,052,000

一九六二年度 東京支部総会

四月二十一日午後一時三〇分より体協会議室に於て開催された。

次第

一、開会の辞　折井健一
一、一九六一年度事業報告　安彦六郎
一、一九六一年度決算報告　岩佐吉雄
一、一九六二年度予算案付議　岩佐吉雄
一、支部規約改正の件　折井健一
一、役員改選の件　折井健一
一、閉会の辞　折井健一

尚議事は全議題満場一致可決された。

一九六二年度支部役員

支部長　石原　憲治
委　員　折井　健一　坂倉登喜子
安彦　六郎　三枝　礼子
芳野　赳夫　山口　節子
宇田川允敏　朝倉　宏
中　保　篠原　敏弘
大屋　悌二　岩佐　吉雄
関口　周也　錦織　保清
鈴木　郭之　野萩　守
富田美知子
監　事　山下　一夫　沼倉寛二郎

決算報告・予算及び支部規約は別記の通りであります。

昭和36年度決算報告

日本山岳会東京支部

科目	36年度予算	36年度決算	摘要
収入の部			
前年度繰越金	25,686	25,686	
支部会費	50,000	105,400	35年度532人 36 522　1054人×¥100
事業収入	70,000	0	
雑収入	0	5,818	支部15周年記念パーテー剰余金他
計	145,686	136,904	
支出の部			
事業費	105,000	10,220	銀嶺山行，三水集会他
交通費	20,000	22,223	
通信費	0	1,735	
外交費	0	7,330	スライド他
渉外費	0	2,700	役員総会他
資料費	12,000	12,000	
会議費	5,686	140	
本部庶務費	3,000	80,550	
雑費	145,686	136,904	
繰越金			
計			

昭和37年度予算案

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	80,550	事業費	47,000
支部会費	53,000	交通費	25,000
		渉外費	3,000
		資料費	20,000
		会議費	3,000
		本部庶務分担金	12,000
		雑費	1,000
		予備費	22,550
計	133,550	計	133,550

日本山岳会東京支部規約

第一条（総則）本支部は日本山岳会東京支部という。

第二条　本支部の事務所は東京都に置く。

（目的および事業）

第三条　本支部は日本山岳会定款に定める目的を達成するために次の事業を行う。

一、会員相互の親睦強化
二、登山ならびに研究
三、山岳に関する啓蒙
四、山岳関係団体との提携
五、目的を同じくする他の団体との連絡
（組織および会員）

第四条　本支部は日本山岳会々員であって東京都、千葉県、埼玉県ならびに神奈川県に在住する者をもって組織する。

第五条　本支部会員は本会定款第九条に規定所属を希望する者は加入できる。

第六条（役員および評議員）本支部は次の役員および評議員をおく。

一、支部長　一名
二、監事　若干名
三、評議員　若干名

第七条　評議員は支部総会で支部員の内から選出する。

第八条　評議員は委員会の推薦により支部長が委嘱する。

第九条　本支部は本支部の業務を総理し、本支部を代表する。

第十条　委員会を構成し総会の決議に従い支部の運営にあたる。委員は委員会に委任する。

第十一条　監事は支部会計を監査する。

第十二条　評議員は支部会の諮問に応じ意見を言うことができる。

第十三条　役員および評議員の任期は次のとおりとし、再任することができる。

一、支部長　一年
二、その他の役員　一年
三、評議員（総会）　一年

第十四条　総会は毎年一回支部長が召集する。

支部長、委員会または監事が必要とし認めたときは支部長が臨時総会を招集することができる。

第十五条　次の事項は総会の承認を受けなければならない。

一、支部規約の改正。
二、収支予算と決算。
三、その他委員会で必要と認めた事項。

第十六条　総会の決議は出席支部会員の過半数で決定する。ただし総会の議案については書面をもって予め意見を表示したものは出席と認める。

第十七条（資産および会計）本支部の経費は支部会費および寄附金その他の収入をもってこれにあてる。

第十八条　本支部の会計年度は毎年四月一日に始り、翌年三月三十一日に終る。

第十九条　本支部の会費は年間百円とする。

（附則）

第二十条　本規約に定めない事項については本会定款によるものとする。

第二十一条　本規約は昭和三十七年四月二十一日から施行する。

☆東京支部忘年山行☆

（奥武蔵・武甲山）

一九六一年の忘年山行は、十二月九日、正丸峠のガーデンハウスに集合して一泊、翌十日武甲山へ登った。エーデルワイス・クラブとの合同山行で、総勢五十三名、ガーデンハウスは先着のエーデルの人たちが美しい飾り付けや豊富な食事の用意をしていてくれた。

夜八時頃みんな揃ったところで少し早目のクリスマス・イヴを祝った。「南極料理」というものに満腹したあと、クリスマスケーキに一杯ローソクを灯し、電灯を消して「聖しこの夜」を合唱し終って一同寝についた。

翌十日朝、八時三十分のバスで正丸峠を下り、根子屋で下車。空はよく晴れて、まん前に仰ぐ朝靄の武甲山はすばらしい。九時半、五十余名の長い行列で四キロ歩き、表参道登り口に到着、ここから立派な桧林の中の登りとなり、頂上着一時。そこの雑木林の中で休んで食事をする。風もない快晴で展望もよい。色とりどりのエーデルの女性が樹間に散らばって、花がいっぱい咲いたようだ。

二時出発、西参道を下る。新雪が雑木林の中の急坂をおおっていた。雨乞岩の露岩の間の急な下りが終って、上ノ丸山で小憩、下ノ丸山で道を右にとり、宇根の部落へ出たときには、傾いた冬の日ざしが人家の白壁を赤く染め、逆光を浴びた武甲が見事であった。長い村道を歩いて姿でバスに乗ったのが四時二十分、正丸峠へ向かっているうちに日が暮れてしまった。

吾野着六時、電車が出たばかりのところで、次の発車まで一時間駅前のバス・ガレージで、積んであった焚木の束を腰かけにして車座になり、ウィスキーをのんで温まった。食堂などへは入らないで殺風景なガレージの中での歓談はけだしこの山行の最後を印象づけるのに非常に有効であった。

（Y・I）

▽参加者

（JAC、日本山岳会）

・今井雄二、今井喜美子、太田敏、太田和子、古沢肇、岩佐吉雄、中保、（EWC、エーデルワイス）

・竹内崎隆章、川内みつ子、原坂倉登喜子、和弘公枝子、佐谷水子、島喜子、北伏千子、田路万良、保日祐、屋久子、石平子、原信安枝子、
八木淳川島美黒子、橋本子、田子良佐乃子秀館、子野千米相、松原谷賀川加子久田荒子子、仁明井、邦綾藤、友井子和佐子子邦松子子、一新遠子喜子、代登喜子、
黒子野、子尾、江井藤、清千高恵安浅井玲子、
石堤阿登城内部谷子、圭川山崎小子、田代友子、子し喜桜子子淑藤、恵井兼枝、高
恒和代島芳菅、子久井、子芳大森、和子高

以上

静岡県支部報告

四月・2土会そのほか

静岡県支部の四月の「2土会」は四月十四日初めての現地小集会の形式で行ないました。

静岡県国民宿舎として昨秋完成した伊豆湯ケ島の「小太刀荘」を会場として、一応参加者二十名を予定していたが、申込は三十五名あり、世話係は「コマッタ、こまった」の連発をしながら、当日を迎えたところ、東京本部関係が一名も来られなかったのは、今後、全国各支部で、何かの会合を計画した場合、出席と連絡してありながら何らの連絡なしの無断欠席は準備する地方では大いにメイワクであり、JACの体面にもかかわることですから、本年からは斯様のことのないように願います。

さて、四月十四日（土）当夜は東京・霧の旅会の皆様持参の、南は九州のワサビ蓮根やら、東北の菜の花の押づけ等ご持参願い、静岡勢はただタダお酒のおしゃくをするだけの無能ぶりでした。

翌十五日は、支部長牧野衛氏のご厚意に甘えて、天城峠までの往復をハイヤーを連ねてのモッタイなさ、八丁池で若者達が二百名ほど青春を楽しんでいるのを驚いたり、カンズメの散乱にオコッタリ。

とにかく、伊豆の軽い山旅を一同で楽しみました。

●当日参加者●

・JAC関係、神谷、松本(熊)、田口、原田、山崎、野口、牧野（以上霧の旅会）、山本、磯野、石間、渡辺、池田、杉山、川端、柴田、鈴木璋、望月（以上県支部）、鈴木、小川、池田、長田、稲葉、小村（以上竹中工務店静岡支店山岳部）計二十三名。

× ×

最近の南アルプス・静岡県側のニュース

(1) 支部会員、山本朋三郎が静岡県観光審議委員に推撰され、国立公園、県立公園の問題もあり、県観光課より指導標の設置場所、デザイン、色彩に関し、相談を受け、支部として種々意見を出し、その結果、約三〇〇〇枚の指導標を南ア・静岡県側に設置することになった。

(2) 五月一～五日、県観光課の予算化に伴い、山本朋三郎、柴田昌亮、鈴木璋一の三名が県観光課六名、地元井川村四名、本川根関係三名とともに茶臼岳附近の新設山小屋、及び登山道の調査を行なった。

(3) 荒川岳、東岳附近で最近遭難が多いので、五―六名収容の避難小屋の位置・形式の決定、調査を県支部山本あて地元井川村から依頼され、七月十五―十八日、調査登山を支部と地元協同で実施の予定。（山本朋三郎記）

福岡支部集会と登山

⊙時、四月十四日、午後七時より
⊙場所、英彦山、八幡製鉄山の家
⊙報告・協議事項
(1)新年度役員について。
(2)会費値上げについて。
(3)ルーム・山荘基金募金現在高。
(4)其の後の支部、本部役員会議事について（議事録により了承）
(5)本集会不参加者の不参理由について（回答ありたるもののみ）
（以上報告）
(1)ルーム・山荘基金追加募金について。
(2)JAC会員章（バッジ）の品質低下について。（戦前の程度に引上げてもらいたい）
(3)集会不参者は欠席回答ぐらいはして欲しい。
(4)次期集会・登山は福岡市近傍で行う（担当、高尾）
(5)東京における会員総会に都合がつけば支部長が出席する。
（以上協議）

＜参加者名＞

・高尾、福永、阿部、月原、田代内野、浦田、三上、橋本、末松、江口、秦野、吉村、仰木他二名。

× ×

＜四月十五日・コース＞

山の家―高住社―薬師峠―ケルンの谷―こもり水―三呼峠―英彦山神社。

山登 英彦 裏英

薬師峠はショウジョウ・バカマがこぼれるように咲き乱れている。それに今日は英彦山神社の春の大祭で、峠は耶馬渓からの参詣者がつづいている。峠を過ぎて裏英彦山の道に入ると、此処には人の姿もなく、静かで落葉踏む音だけが物淋しい。新緑はまだまだだが、裸の樹間からは阿蘇、九重、由布、耶馬の山々が遥かに霞んで呼んでいる。石楠花もわずかながら残っているのが数ケ所見られた。そのあたり小鳥の声も高い。秋はいいだろう。キャンプして月見の宴をと、ささやく声もある。

神社に出ると桜花らんまんの参道には神幸のお上りで、参詣者の黒山のような人垣。のんびり裏英彦を味わって、またこの賑やかな花の祭りで、英彦山も万更でもなかったと、昨夜から今日一日、会員楽しく歓を交えて満足しながら山を下る。

今回の集会・登山には山の家の仰木さん（会員）に大へんお世話になった。（橋本三八記）

第二一九回小集会

◇日時 37年5月16日（水）6時
◇会場 本会ルーム
◇演題 インド紀行
―デカン高原の旅―
◇講師 西丸震哉氏

▽来会者氏名

・山崎安治、山口一孝、松本熊次郎、山崎智弘、藤原武夫、倉科馨、谷津邦郎、佐藤新六、阿達憲、渡辺公平、小野利次、鈴木英一、関口周也、池田光二、中保、川上順子、富田美知子、坂倉登喜子、相川量平、中村純二、竹村元作、芳野菊子、油谷次康、矢田城太郎、稲垣純男、東京薬大（笠原正明、横川宣行）折井健一、芳野赳夫、西川益生、勝田房治、隈部恵子、深田久弥、山口節子、岩佐吉雄、関根吉郎

以上三十七名

× ×

今月の小集会は東京支部三水会（第三水曜日定例集会）と共同で開かれたが、西丸氏の興味深い話に加えて八ミリの映写もあり、盛会であった。

講演要旨は別記（18頁に掲載）の通りである。

（司会・中保）

小集会講演要旨

5月16日

インド紀行
—デカン高原の旅—

講師　西丸震哉氏

日本熱帯医学会、東京新聞社主催の中南部インド学術探査隊は隊長小生、他に山岳会員としては医師の三井源蔵、薬草研究の木村碩志の両氏、全員八名で構成され、六一年十二月下旬から六二年四月中旬まで主として南部インドの山岳地帯を自動車二台で行動した。

学問的には次の成果があった。

一、栄養学、インド人の栄養嗜好の現況がくわしくわかり、インド人の今後の食生活改善方法が算出される基礎資料を作り得た。四千年間文明社会と交渉のなかった人種を調査した結果、嗜好、味覚の歴史的変化を確認することが可能となった。

二、薬学インド産薬草の未知の部分を調査し、おそらく現在のものよりも効果があるであろうと思われる血圧降下剤、血圧上昇剤、頭脳強化剤、制ガン剤などが見出された。

三、医学、熱帯風土病に対して最も進んだ成果を収めているインドの方法を十分に観察し、特にマラリヤコントロールについては他の熱帯諸国への活用に好い手本となる。またライ病、フィラリヤ等の現状をかなりつぶさに見られた。ライ病は全インドに二〜四百万人現存すると思われる。コレラ、熱帯カイヨウは現在もかなり濃厚に残存する。ペストは森林ペストの形で存在するが、めったに人間界には来ないらしい。マラリヤは全インドからほとんど影をなくしていると考えられる。

四、熱帯に居住すべき日本人が環境に順応するための条件の決定など。

乾期に関するかぎり、熱帯の生水は飲んでもさしつかえないことを隊員の生体実験で実証したが、モンスーンではこれは危険である。しかし今までむやみに水を恐れてきた人達には、洗脳すべきことであろう。

インドの動物

インド象はアフリカ象に比しおとなしいといわれるが、野象についてはこれは全く誤りで、交尾期は特に危険である。一定距離以内に近ずくとふみ殺される。集団には牙の大きなオスが一頭おり、メスは交代でモーションをかけに行く。この集団からはみ出たオスは集団から百メートル以上はなれたところに一頭だけションボリしていて、メスの発情をものほしげになながめている。そのうちに出馬して選手交代してやろうと考えているのだろう。

ワシ、日本では天然紀念物になって何十羽か生存するにすぎないワシも、インドでは何百万となく飛んでいる。首の毛がハゲていて長い黒いのがベンガル・バルチャーで最も多く、白毛が多くてかなりきれいなホワイト・スカヴェンジャー・バルチャーもかなり居る。これらは死体にむらがり、牛や水牛を二日以内に骨だけにしてしまう。

人間の娘の死体を喰っているのに出会ったが、これはペルシャ系の住民のものである故に、消極的鳥葬、つまり鳥に喰わせて天国へ運んでもらうというつもりはないが、うっちゃらかしておいたら鳥がかたずけてしまったから世話が省けたという程度の鳥葬と判断した。牛の場合には骨だけになるとロバにかつがせて持ち帰り、骨細工に使用する。

インド人の大部が肉食をしないから肉を鳥に喰わせるのは経済的方法である。

猿は大小とりまぜて、多種でかなり多くが全土に住んでいる。髪をまん中からわけて、クシをていねいに入れ、床屋から出てきたばかりのようなオシャレな種類もある。

毛が灰色のキツネが多く、道ばたでキョトンと見物しているものが多い。

虎はベンガル・タイガーと称し熱帯疎林に多く住む。全インドの虎を推定してみたが、二千五百頭くらいであると思われる。

夜行動物であるから、夜間ジャングルを歩くとチラリと拝見することが出来る。

深夜、虎がナワバリ確認のためにたった一声どなったのを聞いたが、四方の山々にコダマしてハラワタまで寒々となるようなコワサを感じる。

ライオンはインド西部の小半島に二百頭が居住する。アジヤにはライオンがいないというのは誤りで、しかも虎に追われたというのも誤りである。虎とライオンとでは居住環境が異なる。おそらく彼等にきいてみたら、そんな相手は知らないというにちがいない。

インドは特に鳥の天国で、クジャク、インコ、雀、カラス、すべてがびのびと生活しており、人をやたらに恐れない。人もチョッカイを出さない。これは日本人が大いに見ならうべきことであろう。スバコなどをつくってゴキゲンとるよりも、空気銃やパチンコで追いまわすのをやめてくれと彼等は要求することだろう。

デカンの山

東部の東ガーツは一見火山的な山体をしており、独立峰が多い。

西ガーツの南部は岩峰で、山体が一つの岩塊であるから、その側壁は雄大なフェイスを形成する。デカンの最高峰は南部にあって、二、六九五メートル、二千メートル以上の突峰はかなり存在する。

デカン高原は北へ向って順に低くなる。侵蝕が進むとテーブル状の山体が残り、特に硬い層が突起となる。台湾の怪峰、大覇尖山↙

(二二〇号訂正)
六十年の隔たり

	誤	正
1頁1段	苦斗	苦闘。
〃 2段	慧海師	慧海伝。
〃 〃	アンマリー	マンマリー
1頁3段（行1〜4）	こういう同時代的な背景から見ても、慧海師の単身ドウラギリ附近越えてのチベット入りは、やはり相当に特異なものを持っているといってよい。	時代的な背景から見ると、ヒマラヤの探検時代はすでに始っていたが、慧海師のチベット入りは、やはり特異なものを持っていた。
〃 4段	六十余年のことだとは	六十余年前。のことは
2頁1段	足跡をたどり	足跡をたどり
〃 1段	私たちの心づよく感じることなのである	私たちに心づよく感ぜられる。
〃 2段	晩餐会	夕食会
〃 3段	ご機嫌なためだった。	ご機嫌がわるかった。
〃 3段	理由だがそれは	理由だが—それは
〃 4段	の交りは、感動なしには	の交りには感動せずには↓

↙(三、五七三メートル)と全く同じやり方で作られた山々である。尖峰奇峰がそこここにやたらと林立しており、未登頂の山も多い筈である。かなり登頂困難を思わせる山もある。

デカンの北西部は砂漠地帯に近い関係上、荒れはてたところである。何日進んでも一向に景色が変らず、ただ黄色に乾いたところ。

最後にガクンと落ちて平地になる部分はグランドキャニオンを思わせる雄大な渓谷が入っていて、かなり雄大ながめである。

砂漠

デリーの西および南はすぐにラジャスタン砂漠につながる準砂漠地形で、潅木が点在するにすぎない。砂漠のはじまりは乾燥地が雨裂によって深くえぐられ、深さ十メートルくらいの入りくんだ谷と侵蝕され残った泥の塔が林立する迷路のようなものをつくる。この地帯に反政府の色彩を帯びた盗賊団ダコイトが出没して旅行者を殺したり、金品をゆすり取ったりするが、この地形に守られているのでインド軍や警察もこれを滅ぼすことが出来ないでいる。

かれらは火炎放射器や機関銃を装備していて三十人ぐらいが組になり勇猛である。町ぐるみ「ダコイト」というようなテッテイしたところもあって、ここを通過するときは虎に会いに行くときなどとは全くくらべものにならないくらいの悲愴感がみなぎった。

↓

〃 5段 力説している。大きな変化が、好む苦闘。気がする。

〃 〃 のである。大きな変化が、好む苦斗。気がするのである。

〃 〃 し好む

〃 〃 苦斗

〃 〃 気がするのである。

36年度11回図書委員会

三月二十九日・ルーム

▽出席、深田、徳久、加藤、大橋山崎安治

▽議事

①JACレジスター編纂の件

②委員増員の件

③支部報の件

現在関西支部より定期的に送付を受けているが、各支部からも送っていただくようお願いしたい。

④索引カード作成について

⑤その他

◇「山岳」56年刊行◇

山岳56年が刊行された。(二二一頁、英文梗概二〇頁、写真四三、地図一四)、三十六年度会費納入ずみの会員には既に配本した。会費未納の方には送ってないからこの際会費を払込んでいただきたい。

昭和三十七年六月二十五日発行
東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
発行所 社団法人 日本山岳会
編集者 古沢肇
電話神田(291)八九五二番
振替口座東京四八二九番
頒価二十円
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂